１９９１年

広島でアジア選手権大会を開催

日本ハンドボール協会
専務理事　安藤純光

昨、１９８９年８月北京において開催された男子第５回、女子第２回アジア選手権大会の開幕を控えて開催された。アジア・ハンドボール連盟（Asian Handball Federation：AHF）理事会において、日本が提案していた１９９１年に開催される男子第６回、女子第３回アジア選手権大会を提案の通り、広島（日本）で開催することが決定された。

アジア選手権大会は、過去１９７７年にクウェートにおいて第１回が開催され、１９７９年に第２回が南京（中国）において、１９８３年に第３回がソウル（韓国）において、１９８７年に第４回がアンマン（ヨルダン）においてそれぞれ開催され、このとき女子第１回が同時に開催されている。

アジア連盟の加盟国の一員としての広島（日本）の開催は、その責任上おそくとも早すぎることはない当然の開催であろう。これとは別な意味で、アジア連盟専務理事 Syad Abul Hassan 氏の言葉をかりれば「第３回のソウルそして第５回の北京がそうであるように、アジア競技大会の開催が決定している国が、いわばリハーサル大会として選手権大会を開催する方式ができあがりつつある。広島での開催もこの方向にあるので、好ましいことである」ということもある。すでに１９９４年に広島においてアジア競技大会を開催することが決定し、準備が進められている。

さて、いずれにしても日本ハンドボール界の50年を越える歴史の中で、かつて経験のない最大級の国際的なイベントを迎えることになった。

しかもこの大会は、１９９２年のバルセロナ・オリンピックのアジア予選を兼ねる大会でもある。これを機に、かつて座したアジアの King・Queen の座をとりもどし、５連続オリンピック出場を誇りとするわが男子ナショナルチームが、さらに６連続へ、そしてモントリオール以来途絶えている女子の出場も果たさなければならない課題である。

１９９１年に開催されるアジア選手権大会は、８月下旬から９月１日（日）を最終日として、約10日間にわたって開催されることになっている。また、参加国としては、男子12ヶ国、女子６ヶ国が予想される。

大会開催にあたっては、開催地である広島県・広島市、そして広島県ハンドボール協会・広島市ハンドボール協会の諸機関、関係諸兄の絶大な協力を得なければ、大会の開催への道は開けないし、達成することはできない。

そして、さらに全国のハンドボール関係者の力強い協力と支援を得なければ遂行できない大事業である。

開催地である広島の関係諸兄をはじめ、全国の各関係諸兄の理解と大きなご協力をお願い申し上げる。

第41回全日本総合選手権大会

大崎電気が2年連続のアベック優勝

第41回全日本総合選手権大会は12月21日から24日までの4日間、東京・駒沢屋内球技場、駒沢体育館で開催された。

男子は16チームが参加、決勝戦は昨年と同じく大崎電気対湧永製薬の顔合せとなった。試合は雪辱を期する湧永が一時6点のリードを奪ったが、後半のなかばから全く攻めあぐみ、大崎の大逆転を許した。

一方の女子は、大会前の予想通り大崎の強さが際立ち、決勝戦は先の日本リーグで2位になった大和銀行との対戦となったが、金、尹の両選手を軸とした圧倒的な得点力で快勝、3連覇を飾った。

大崎電気は、これで昨年に続き男女アベック優勝という〝有終の美〟を飾った。

男子

1回戦

湧永製薬55〔29―8 26―7〕15自衛隊横須賀

〔戦評〕前半5分まで湧永リードの静かな立ち上がり。ここから自衛隊横須賀にオフェンスミスが続出。湧永は速攻の連続で15点を連取。

瞬間的なプレーのスピード、読み、シュート力など両チームの差は大きく、自衛隊も単発的にだがいいシュートを決め、精一杯のプレーを見せたがゲームにならなかった。辛いゲームを最後までよく健闘した。

得	〔湧永〕		〔自衛隊〕	得
0	徐	GK	吉田	0
0	多田	GK	丸山	0
5	酒巻	FP	桑原	1
0	河原	FP	井上	2
10	玉村	FP	斉藤	2
9	堀田	FP	末武	7
8	新井	FP	杉田	3
1	中川	FP	及川	0
12	長沢	FP	浜田	0
1	荷川取	FP	松村	0
8	鎌塚	FP	棚木	0
1	楢原	FP		
55	(3)	PT	(0)	15

（審・後藤・島田）

トヨタ自動車28〔13―13 15―13〕26日大

〔戦評〕立ち上がりからトヨタは日大のポストプレーをよく防御して攻撃リズムを崩す一方、川田のミドルシュートを軸に得点を重ねて5―0とリードする。

中盤、攻撃を立て直した日大はコンビネーションの良い攻撃で、粘り強く、徐々に追い上げ、前半終了直前には逆に1点リードするが、結局同点となって後半へ。

後半は、両チームともに一進一退を続けたが、23分にはトヨタが3点差をつけ、追いすがる日大をふり切った。

得	〔自動車〕		〔日大〕	得
0	西井	GK	堀江	0
0	富森	GK	鬼頭	0
10	香井	FP	雨宮	2
6	川田	FP	杉谷	4
0	酒井	FP	渡辺	5
7	堀江	FP	吉野	4
0	中西	FP	丹羽	7
1	田村	FP	西岡	0
0	石本	FP	加藤	0
0	村上	FP	鮎沢	1
4	杉元	FP	野田	3
0	森	FP	井手	0
28	(1)	PT	(4)	26

（審・岡本・清水）

大同特殊鋼35〔17―10 18―11〕21福岡教員

〔戦評〕前半の立ち上がり、大同は3連続得点で先行し、ペースをつかんだ。一方福岡教員は、サイドシュート、反撃速攻と対抗したが、17―10と大同の7点リードで終る。

後半に入り、またも大同は4連取で好スタートを切った。福岡は大同・明石に対するマンツーマンの守りも通用せず、大同の地力の勝利に終った。

得	〔大同〕		〔福教〕	得
0	秋吉	GK	七條	0
0	林	GK	澤井	0
10	田中	FP	野田	7
2	内藤	FP	山崎	1
1	高村	FP	牧島	2
5	朝生	FP	古賀	3
11	畑	FP	塩山	0
0	明石	FP	藤田	2
0	植木	FP	白木	0
5	佐藤	FP	平野	0
1	阿萬	FP	堤	2
0	名取	FP	早川	4
35	(5)	PT	(3)	21

（審・川島・森）

日新製鋼35〔16―14 19―12〕26パームヒルクラブ

〔戦評〕立ち上がりから両チームとも巧みにポストプレーを利用して得点をあげた。特にパームヒルクラブは、大型ディフェンスの日新に対し息の合ったパスプレーを展開し、前半はほぼ互角のゲーム展開で終了した。

後半に入り、日新ディフェンスはフォローディフェンスが良く、パームヒルクラブの走りのプレーをうまく押え、逆にパームヒルクラブのミスからうまく速攻につなぎ、得点を重ねていった。得点差は開いたものの、最後まで全員一

得	〔日新〕		〔パーム〕	得
0	谷	GK	新庄	0
0	宇田川	GK	奥間	0
5	武田	FP	黒島	5
6	西山	FP	東江	8
4	高木	FP	名嘉	2
2	甲斐	FP	新垣	2
5	藤井	FP	上原	1
1	堀田	FP	内原	4
4	藤本	FP	新里	1
3	池田	FP	喜舎	3
1	野中	FP	新城	0
4	木村	FP	宮城	0
35	(2)	PT	(4)	26

（審・林・佐藤）

丸となって、走りの展開をしたパームヒルクラブの健闘を讃えたい。

本田技研鈴鹿 42〔22—11, 20—9〕**20 栃の葉クラブ**

〔戦評〕立ち上がり、本田は立木のロングと平松のサイドシュートで2点先取。対する栃の葉クラブは岸のサイドシュートやペナルティーシュートで追撃すると、5分過ぎに本田GK橋本の好守から3連続速攻を決められ点差をあけられた。

栃の葉は滝口、武井のロングシュートで本田ディフェンスを破ろうとするが、厚い壁に阻まれ、逆に本田の速攻を許す。ペースをつかんだ本田は立木がロングシュート、カットインシュートと良い所で加点し、栃の葉を突き放した。

後半に入り、メンバーを入れ替えた本田ディフェンスの乱れをつき、栃の葉が得点するが、終盤に入り疲れからか栃の葉にミスが出はじめ、それを本田が得点に結びつけ42—20で終了。

	〔栃の葉〕	得	〔本田〕	得
GK	染谷	0	高木	0
GK	石田	0	橋本	0
FP	中田	4	真砂	7
FP	四元	0	福島	4
FP	山下	3	立木	7
FP	新開	0	内藤	5
FP	岸	1	粟屋	4
FP	滝口	4	田口	0
FP	小西	0	平松	5
FP	中山	5	山本	5
FP	武井	3	福村	5
FP			梅基	0
PT	(2)	20	(5)	42

（審・馬場、浜田）

日体大 41〔19—14, 22—7〕**21 トヨタ車体**

〔戦評〕立ち上がりは両チームともGKの活躍もあり、互角の展開を見せたが、10分過ぎから日体大は速攻を連発して得点を重ね、セットでも下地のテクニックを中心にトヨタ車体のディフェンスをゆさぶり、20分過ぎには16—9とする。しかし、日体大ディフェンスの荒さが目立ち、トヨタが君島のカットインなどで追い上げ、19—14と5点差で前半を終了。

後半、両チームとも一進一退をくり返したが、前半同様、走力に勝る日体大が一次速攻、二次速攻とスピーディな攻撃を連発し、トヨタのシュートミスにも助けられリードを大きく広げて快勝した。

	〔車体〕	得	〔日体大〕	得
GK	宮本	0	比嘉	0
GK	村林	0	糸井	0
FP	吉続	5	安達	3
FP	君島	5	佐藤	1
FP	福田	1	吉迫	6
FP	岡島	6	高木	6
FP	河合	1	小橋	2
FP	奥田	0	堤	1
FP	赤星	0	積	5
FP	東	0	下地	9
FP	久保山	2	本庄	3
FP	蓑田	1	佐藤	5
PT	(0)	21	(2)	41

（審・小笠原、浜田）

三陽商会 27〔13—14, 14—12〕**26 早大**

〔戦評〕互いにディフェンスに甘さが見られ、14—13と早大が1点リードで前半を終る。

後半も淡々としたゲーム展開で早大リードで進んだが、20分過ぎから三陽はベテラン関を投入し、5連続得点をあげて一気に逆転、そのまま逃げ切った。

	〔早大〕	得	〔三陽〕	得
GK	中嶋	0	宇田川	0
GK	荒木	0	高橋	0
FP	大橋	5	浜川	3
FP	猪田	0	飯島	5
FP	大中	2	大坪	1
FP	大村	8	砂川	5
FP	菰原	3	山口	6
FP	河野	0	浜田	4
FP	鳥平	4	安藤	0
FP	原	0	吉原	0
FP	岩本	4	近藤	2
FP	中野	0	関	1
PT	(2)	26	(3)	27

（審・島崎、井上）

大崎電気 36〔19—13, 17—11〕**24 全福岡**

〔戦評〕元実業団の好選手であった清家のうまいゲームメークで福岡は、大崎の高いディフェンスラインを突破し、前半なかばまではほぼ互角の闘いに持ち込んだ。しかし、地力に勝る大崎は、全日本代表の主砲・宮下や首藤、さらに期待の若手・甲斐らのロングシュートで善戦する福岡を突き放し、結局12点差で勝利を握った。

	〔福岡〕	得	〔大崎〕	得
GK	山田	0	渡辺	0
GK			矢内	0
FP	浜口	6	松岡	4
FP	柏原	2	大和田	4
FP	牟田	0	武田	1
FP	永井	1	首藤	5
FP	清家	7	中田	4
FP	安河内	0	山本	0
FP	板山	2	甲斐	8
FP	新谷	1	菅田	2
FP	大久保	5	相馬	3
FP			宮下	5
PT	(2)	24	(3)	36

（審・浜田、小笠原）

2回戦

湧永製薬 35〔18—7, 17—12〕**19 トヨタ自動車**

〔戦評〕トヨタが2点先取し、湧永も4点を連取する。そのまま湧永が波に乗るかと思えたが、シュートミスなどがあり、互いに得点、20分で9—7からディフェンスがかみ合い出し、速攻などで9連続得点し前半を終了。

後半に入り、トヨタは香井のパスカット、サイドシュートなどで反撃するが、前半の点差が大きく敗退した。

	〔自動車〕	得	〔湧永〕	得
GK	西井	0	徐	0
GK	富森	0	多田	0
FP	香井	6	酒巻	4
FP	川田	4	河原	1
FP	酒井	0	玉村	9
FP	堀江	2	堀田	0
FP	中西	2	新井	8
FP	田村	1	長沢	3
FP	石本	0	荷川取	5
FP	松尾	0	鎌塚	1
FP	杉元	2	奥田	3
FP	森	2	楢原	1
PT	(2)	19	(1)	35

（審・上久保、北井）

日新製鋼 29〔12—9, 8—11, 2—2, 2—2, 3—2, 2—1〕**27 大同特殊鋼**

〔戦評〕立ち上がりから両チーム気合いの入った攻防を展開し、ガップリ互角にわたり合ったが、大同・高村の退場を境に4連取した日新が3点リード。

後半に入ってもそのままリードを続ける日新を大同は粘り強いディフェンスから追いかけ、20分過ぎから4連取して、逆転。日新も粘ってPTで同点とし、20—20で延長へ。

第1延長も一進一退の緊迫したゲームを展開、24—24で第2延長へ。ここでも息づまる攻防の末、西山のミドルシュートでリードした日新が逃げ切った。

	〔大同〕	得	〔日新〕	得
GK	秋吉	0	谷	0
GK	林	0	宇田川	0
FP	田中	9	武田	3
FP	内藤	3	西山	5
FP	高村	3	高木	6
FP	朝生	2	甲斐	3
FP	畑	0	藤井	7
FP	明石	7	堀田	1
FP	植木	0	藤本	2
FP	佐藤	3	池田	2
FP	阿萬	0	野中	0
FP	名取	0	木村	0
PT	(3)	27	(4)	29

（審・小林、宮沢）

本田技研鈴鹿 25〔15—9, 10—9〕**18 日体大**

〔戦評〕両GKの好守から次々と出される速攻に目が離せない好ゲームとなった。前半なかばまでせり合っていたが、本田は退場者を出しながらも着実に得点し、6点差として前半を終った。

後半に入り、日体大は速攻やサイドのスカイプレーで反撃し、3点差まで追い上げるが、それ以上縮まらず、お互いに持ち味を出しながら一進一退を続けたが、本田のうまさに敗退した。

〔日体大〕		得
GK	比嘉	0
GK	糸井	0
FP	安達	4
FP	佐藤	0
FP	吉迫	0
FP	高木	3
FP	小橋	1
FP	堤	0
FP	積	2
FP	下地	5
FP	本庄	1
FP	佐藤	2
PT	(3)	18

〔本田〕		得
GK	高木	0
GK	橋本	0
FP	真砂	5
FP	福島	0
FP	立木	7
FP	尾上	0
FP	内藤	3
FP	粟屋	4
FP	田口	0
FP	平松	0
FP	山本	6
FP	梅基	0
PT	(1)	25

（審・後藤、島田）

大崎電気39（22—10、17—13）23三陽商会

〔戦評〕立ち上がり、三陽・飯島のロングで先行したが、大崎も首藤、宮下を中心にロングとサイドで得点をあげ、15分過ぎには8—4と大崎がリードを奪うが、三陽も大崎のディフェンスの甘さをついて浜田の活躍で追い上げたが、要所で大崎GK矢内に阻まれ、その間に大崎が速攻、ミドルなどで着実に得点を重ね、前半は17—13で大崎リードで前半を終了。

後半も大崎が山本のサイド、PT宮下のロングで差を広げ、三陽のシュートの間、首藤のスカイ大和田のポストと10分過ぎには25—15と10点差をつけた。その後、両チームとも一進一退をくり返し、見応えのあるゲーム展開となったが、差は縮まらず、実力に勝る大崎が、39—23で三陽を降し、準決勝へ進んだ。

〔三陽〕		得
GK	宇田川	0
GK	高橋	0
FP	浜川	3
FP	飯島	5
FP	大坪	0
FP	砂川	3
FP	山口	3
FP	浜田	7
FP	安藤	6
FP	吉原	0
FP	近藤	2
FP	関	0
PT	(2)	23

〔大崎〕		得
GK	渡辺	0
GK	矢内	0
FP	松岡	1
FP	大和田	3
FP	武田	5
FP	首藤	10
FP	中田	1
FP	山本	7
FP	甲斐	1
FP	菅田	0
FP	宮下	7
FP	魚住	4
PT	(7)	39

（審・川島、森）

準決勝

湧永製薬25（11—9、14—10）19日新製鋼

〔戦評〕立ち上がり8分間一進一退の攻防。8分過ぎ湧永は酒巻の3連続得点をきっかけに6—2とリードする。その後得点のとり合いとなり、14—10と湧永の4点リードで折り返す。

後半に入り日新は3点差まで追い詰めるも、地力に勝る湧永は厚いディフェンスで日新の必死の追い上げをふり切り、決勝へと駒を進めた。

湧永は要所でのGK徐の好守から酒巻、河原らが得点をあげ、湧永ペースの試合でゲームを終えた。

〔日新〕		得
GK	谷	0
GK	宇田川	0
FP	武田	3
FP	西山	4
FP	高木	2
FP	甲斐	2
FP	藤井	1
FP	堀田	0
FP	藤本	4
FP	池田	0
FP	野中	1
FP	木村	2
PT	(2)	19

〔湧永〕		得
GK	徐	0
GK	井藤	0
FP	酒巻	8
FP	河原	6
FP	玉村	5
FP	堀田	1
FP	新井	0
FP	中川	0
FP	長沢	0
FP	荷川取	3
FP	奥田	2
FP	檜原	0
PT	(3)	25

（審・浜田、小笠原）



日新製鋼もがんばりを見せたが、準決勝で敗れる

大崎電気23（12—12、11—6）18本田技研鈴鹿

〔戦評〕日本リーグ2位の本田と4位の大崎の戦いは、リーグで2試合とも敗れている大崎の闘志に本田が気遅れしたのか、立ち上がりこそ大崎・菅田と本田・内藤の得点で互角であったが、15分間に菅田のポスト、甲斐の速攻、首藤のロング、本田のミスからの速攻などで連続5点をとられ苦しい試合になった。15分過ぎからやっと調子を取り戻した本田は、エース立木を中心に内藤とのコンビで互角に試合を進めたが、立ち上がりの連続5失点の差で前半を終了。

後半に入ると、本田が連続得点して調子に乗るかと思うと、大切なところで大崎ベテラン宮下と中堅・首藤がカットイン、ロングシュートなどで得点、たえず大崎ペースで展開、勝利を握る。

〔本田〕		得
GK	高木	0
GK	橋本	0
FP	真砂	1
FP	立木	5
FP	尾上	0
FP	内藤	7
FP	粟屋	1
FP	田口	1
FP	平松	0
FP	山本	2
FP	福村	0
FP	梅基	1
PT	(4)	18

〔大崎〕		得
GK	渡辺	0
GK	矢内	0
FP	松岡	0
FP	大和田	0
FP	武田	4
FP	首藤	8
FP	中田	2
FP	山本	0
FP	甲斐	2
FP	菅田	4
FP	宮下	3
FP	魚住	0
PT	(1)	23

（審・川島、森）

決勝

大崎電気22〔10—15 12—5〕20湧永製薬

〔戦評〕昨年と同じ決勝カードとなった。この試合の見どころは、湧永の荷川取のポストプレーを中心にフローター・玉村、河原がどのようにゲームを組み立てるか。一方大崎は3枚の大型フローター・首藤、甲斐、宮下の得点力がキーポイントとなる。また、両チームともGK矢内、徐の好守もチームに大きな影響を与える。

前半15分までは両チームとも一進一退の攻防が見られ、接戦の展開となったが、湧永の1—5ディフェンスが大崎のフローター3人の攻撃をよく押え、ミスを誘うかたちで得点を許さなかった。これに対し、ディフェンスの良い湧永が攻撃でも動きが良く、河原、玉村のミドルやロングシュート、荷川取のポストシュートで得点を重ね、23分には12—6とした。しかし、大崎はGK渡辺の投入とディフェンスを1—5に変え、湧永の攻撃を食い止め、残り3分で3点差まで追い上げた。しかし、大崎はここで菅田の痛い2分間退場。この間に湧永が2点をあげて前半を15—10で折り返した。

後半に入ると、立ち上がり大崎は動きが良くなり、GK矢内の好守などで一進一退のゲーム運びとなった。

後半15分過ぎから大崎は首藤の動きが良くなり、3連続得点で残り4分、20—20と追いついた。そして残り1分、ラッキーなリバウンドを中田が決め、とどめに菅田がカットインの得点で22—20とし、大崎が2連覇を飾った。

得	〔大崎〕		〔湧永〕	得
0	渡辺	GK	徐	0
0	矢内		井藤	0
0	松岡	FP	酒巻	2
1	大和田		河原	4
5	武田		玉村	5
4	首藤	（審・後藤 島田）	堀田	1
2	中田		新井	0
4	山本		中川	0
2	甲斐		長沢	0
2	菅田		荷川取	4
1	宮下		奥田	4
1	魚住		楢原	0
22	(2)	PT	(1)	20

女子

1回戦

ジャスコ29〔14—9 15—6〕15武庫川女大

〔戦評〕ジャスコの先取点で始まり、終始リードする。前半10分過ぎまで一進一退のゲーム展開であり、武庫川・西村のロングシュートが目立ったが、徐々にジャスコのGKが慣れてきて、ゴールをよく守り、速攻へとチャンスをつかみ得点を加えていく。

両チームともよく走ったが、ディフェンスの面で武庫川が少し弱く、そこをジャスコがクロスシュート、左右へのフェイントシュートなどで得点し、さらにGKの好守で勝利を得た。

得	〔ジャス〕		〔武庫川〕	得
0	小深田	GK	喜多	0
0	小林		牧	0
7	佐々木	FP	奥本	2
0	王		塩崎	0
1	石田		西村	2
2	稲田	（審・馬場 浜田）	松下	3
0	常石		木村	0
8	川井		篠原	1
8	池田		永井	1
2	東出		西	1
0	寿系		高浪	0
1	今井		西村	5
29	(4)	PT	(1)	15

東女体大19〔12—6 7—9〕15日立栃木

〔戦評〕前半、東女体大はGK村山を中心に堅い守りをし、日立は攻めあぐねる。逆に東女体大の攻撃はリズムを持ち、多彩な攻撃で着実に加点し、6点リードで終る。

後半に入り、日立にいつもの攻撃のリズムが出はじめ、10分までに5点連取し、ゲームは1点を争う白熱したゲーム展開となるが、東女体大はあわてることなく相手のミスを確実に点に結びつけ、日立を終始リードし、ゲームをものにする。

得	〔東女体〕		〔日立〕	得
0	蒔田	GK	岡本	0
0	村山		海津	0
1	佐藤	FP	尾苗	1
0	川西		神永	0
4	伝法谷		柳田	0
0	藤塚	（審・島崎 井上）	山岸	3
3	竹野		吉鶴	1
5	田鹿		飯塚	0
0	藤		繁在家	0
2	吉野		岡田	3
1	井口		石毛	1
3	日比野		新井	6
19	(3)	PT	(0)	15

日本ビクター25〔13—8 12—6〕14小松クラブ

〔戦評〕立ち上がり、ビクターの動きが良く、着実に得点を重ねたが、小松クも木下を中心にポスト攻撃で応戦、点差を徐々につめ、白熱した戦いを展開。

後半に入り、地力に勝るビクターが速攻で点差を広げる。小松クラブも最後までキビキビした動きで戦いを挑むが、ポスト、サイドを中心の攻めだけに、相手のリズムを崩すまでには至らず、敗れ去った。

得	〔日ビ〕		〔小松〕	得
0	小口	GK	川北	0
0	山田		屋敷	0
1	武藤	FP	木下	1
6	長田		酒井	0
5	枝川		角	0
4	下條	（審・岡本 清水）	中島	6
2	太田		和田	4
1	永岡		桜井	1
1	工藤		池田	2
1	中村		竹田	0
2	山之内		中川	0
2	小松		米田	0
25	(1)	PT	(5)	14

シャトレーゼ35〔16—8 19—11〕19広島クラブ

〔戦評〕実力に勝るシャトレーゼは試合メンバーからベテランの嶋崎、黒沼、江原を抜き、2年半ぶりに監督の李京姫を入れ、若手を主体としたメンバーでスタートしたが、攻撃のリズムが合わず苦しいスタートであった。3分過ぎに李のロングシュートが決まったが、狂った歯車はかみ合わず、5分過ぎからメンバーを入れ替えることによりやっとペースを取り戻し、一方的な試合展開とした。

広島クラブは、ポストプレーに時折すばらしい動きを見せたが、ミドルシュート、ロングシュートを打てるプレーヤーが中田一人ではどうしようもなく、善戦するに終る。

得	〔シャト〕		〔広島〕	得
0	丸山	GK	永岡	0
0	工藤		山本	0
10	小松	FP	松本	1
5	海道		川本	0
5	松沢		水木	2
0	小林	（審・川島 森）	猫本	1
5	小野寺		中田	9
1	生方		藤岡	2
1	山岸		立河	0
2	野沢		楠	4
4	小俣			
2	李			
35	(6)	PT	(4)	19

大和銀行35〔19—10 16—10〕20日体大

〔戦評〕日体大が先取したが、その後大和の上村、藤本らが4連続得点して主導権を握る。日体大は小気味良い動きで逆速攻に出ようとするが、高い位置でつぶされ苦戦する。大和は10分過ぎからつめが甘く、ディフェンスの動きが止まったところポスト攻撃をかけ着実に加点する。一方の日体大も竹吉のミドルなどで反撃、流れを取

り戻そうとするがGKの好守に阻まれペースをつかめず，前半を19—10で終る。

後半に入っても大和のポスト攻撃は止まることなく、その上速攻も出だし、追加点をあげる。日体大は最後まで自分たちのリズムを出すことができなかったが、一生懸命全員一丸となり頑張っていた姿勢に好感が持たれた。

〔日体大〕（審・上久保、北井）

	選手	得
GK	松永	0
GK	小松崎	0
FP	市来	2
FP	大間田	3
FP	新田	1
FP	人見	0
FP	小島	6
FP	小林	1
FP	児玉	3
FP	竹吉	3
FP	桐谷	1
FP	山田	0
PT		(1)
計		20

〔大和〕

	選手	得
GK	増見	0
GK	簗田	0
FP	丸田	2
FP	鈴木	1
FP	袋川	4
FP	上村	14
FP	小池	6
FP	藤本	3
FP	渡辺	0
FP	木瀬	0
FP	松田	2
FP	瀬川	3
PT		(1)
計		35

北国銀行29〔18—5、11—12〕17福岡教員

〔戦評〕日本リーグ1部復帰で勢いに乗る北国が圧倒的な力の差を見せて大勝した。

福岡教員も今村、田中（清）を中心によくパスを回し、チャンスに藪田がシュートを放ったが、北国の高い壁に苦しんだ。一方北国は、韓国からの金、呉のパワープレーを中心に得点を重ねた。

後半メンバーを変えた北国に対し、福岡のコンビプレー、速攻が決まりだし、互角の展開となったが、前半の大差をつめることはできなかった。

〔福岡〕（審・宮沢、小林）

	選手	得
GK	上野	0
GK	今村	2
FP	松田	3
FP	藪田	6
FP	田中	1
FP	田中	2
FP	田中	0
FP	長沢	3
PT		(1)
計		17

〔北国〕

	選手	得
GK	木戸	0
GK	岩井	0
FP	上田	1
FP	林	2
FP	丹後	3
FP	松田	7
FP	矢野	1
FP	塙	4
FP	金	7
FP	森	1
FP	谷本	0
FP	呉	1
PT		(0)
計		29



今大会北国銀行の健闘が光った

2回戦

大崎電気32〔19—9、13—14〕23ジャスコ

〔戦評〕ジャスコはポストシュートで先行し、10分過ぎまで5—6と善戦するが、大崎は金を中心として多彩な攻撃で得点を重ね、前半を19—9と10点リードして終る。

後半に入っても大崎は着々と加点し、リードを広げた。しかし、ラスト10分、ジャスコも粘りを見せ連続8得点で差を縮めたが及ばず、前半で勝負を決めた大崎の余裕の勝利であった。

〔ジャス〕（審・島崎、井上）

	選手	得
GK	小深田	0
GK	小林	0
FP	佐々木	3
FP	石田	2
FP	稲田	1
FP	常石	0
FP	川井	6
FP	池田	4
FP	東出	5
FP	寿系	0
FP	今井	1
FP	山田	1
PT		(3)
計		23

〔大崎〕

	選手	得
GK	佐々木	0
GK	宗片	0
FP	森田	1
FP	藤井	3
FP	前川	4
FP	梅原	3
FP	江口	2
FP	鷲宮	0
FP	野田	3
FP	金	10
FP	福井	0
FP	尹	6
PT		(3)
計		32

日本ビクター23〔10—9、13—9〕18東女体大

〔戦評〕今大会、学生界で唯一2回戦進出をした東女体大は、センターと45度の2人をケガで欠き、厳しい状態で試合に臨んだ。

前半から一進一退の攻防が続いたが、東女体大は佐藤へのポストプレーからの得点を中心にGK村山の好守などでチームを盛り上げた。一方ビクターは、東女体大のミスから着実に速攻で得点を重ね、一時東女体大にリードを許したが枝川の3連続得点で逆転し、10—9で折り返した。

後半に入ると東女体大の動きが少し鈍り、さすが実業団のチームだけあるビクターは、主導権をしっかり握った。残り8分、3点差でビクターに退場者が出て、東女体大の追撃が期待されたが、逆にビクターが得点を重ね、善戦むなしく学生チームはすべて姿を消す結果となった。

〔東女体〕（審・佐藤、林）

	選手	得
GK	蒔田	0
GK	村山	0
FP	佐藤	2
FP	川西	1
FP	伝法谷	1
FP	藤塚	1
FP	竹野	1
FP	藤	9
FP	吉野	0
FP	井口	0
FP	日比野	0
FP	田島	3
PT		(7)
計		18

〔日ビ〕

	選手	得
GK	小口	0
GK	山田	0
FP	武藤	1
FP	長田	7
FP	枝川	6
FP	下條	1
FP	太田	5
FP	永岡	0
FP	工藤	2
FP	中村	1
FP	山之内	0
FP	小松	0
PT		(3)
計		23

大和銀行25〔12—10、13—12〕22シャトレーゼ

〔戦評〕立ち上がりシャトレーゼは、サイドシュート、ペナルティースローなどで先行した。一方大和は、10分過ぎから連続速攻でエンジンがかかり、一気に逆転し、12—10の2点リードで前半を終了した。

後半、一進一退の白熱したゲームとなった。一時は大和が5点をリードしてそのまま終るかと思われたが、シャトレーゼはラスト3分に1点差まで追い上げ、益々盛り上がった。最後は、大和がポストシュートを決めて終了の笛が鳴った。

〔シャト〕（審・岡本、清水）

	選手	得
GK	丸山	0
GK	工藤	0
FP	小松	2
FP	島崎	0
FP	海道	1
FP	松沢	5
FP	黒沼	0
FP	小林	0
FP	小野寺	1
FP	生方	2
FP	小俣	2
FP	李	9
PT		(5)
計		22

〔大和〕

	選手	得
GK	増見	0
GK	簗田	0
FP	丸田	5
FP	鈴木	4
FP	袋川	4
FP	上村	3
FP	小池	5
FP	藤本	3
FP	渡辺	0
FP	木瀬	0
FP	松田	1
FP	瀬川	0
PT		(3)
計		25

北国銀行29〔17—10、12—15〕25立石電機山鹿

〔戦評〕立ち上がり立石が3—0とリードを奪うが、北国も立石・野嶋をマンツーマンで攻撃を分断し、攻めても金のパワフルなプレーで得点をあげ、10分過ぎには7—5と逆転。その後立石も金をマンツーマンで守るが、5対5の攻防を北国は呉のロングを中心に林のサイド、上田の速攻などで着実に得点をあげ、要所では金がカットイン、PTと活躍し、比嘉を中心に粘る立石に17—10と7点差をつけて前半を終了。

後半も北国がパスカットから林の速攻で先行、立石もGK川島の好守から得点をあげるが、北国は金のマンツーマンで攻撃の中心となった呉が大活躍、ロング、カッ

トインと連続して得点をあげ、15分過ぎには24―14と10点差をつけた。立石も北国に退場者が出る間に積極的に攻撃するが、北国GK木戸に勝負所で止められ、差を縮められず、終盤再び追い上げるが、時すでに遅く、29―25で北国が勝利を握った。

〔立石〕	得		〔北国〕	得
前川	0	GK	木戸	0
川島	0	GK	岩井	0
横田	2	FP	上田	1
山内	0	FP	林	2
中山	5	FP	丹後	1
武津	1	FP	松田	5
野嶋	5	FP	矢野	1
橋本	3	FP	塙	0
斉藤	0	FP	金	8
石村	2	FP	森	0
古田	3	FP	岩本	0
比嘉	4	FP	呉	11
(1)	25	PT	(4)	29

〔審・浜田 小笠原〕


大崎電気の主砲・尹の豪快なシュート

準決勝

大崎電気 28 〔11―9 17―10〕 19 日本ビクター

〔戦評〕爆発的な攻撃力を有する大崎に対しビクターのディフェンスがどれだけ対応できるか、勝利のチャンスがあるとすれば速攻の展開の如何……。以上のポイントをもったゲームは、開始5分で予想通り大崎の5―1とリードで始まった。しかし、GK小口の健闘もあってビクターは徐々に追いつき、前半を9―11のロースコアで終え、思惑通りに試合を進めた。

後半に入るとさすがに大崎の両砲、金と尹のシュートが次々と決まり、長田らのロングシュートで粘るビクターの追撃をふり切り、戦前の予想通り大崎の快勝となった。

〔日ビ〕	得		〔大崎〕	得
小口	0	GK	佐々木	0
山田	0	GK	宗片	0
武藤	3	FP	森田	0
長田	5	FP	藤井	2
枝川	2	FP	前川	1
下條	4	FP	梅原	3
太田	2	FP	江口	3
永岡	0	FP	鷲宮	0
工藤	1	FP	野田	2
中村	1	FP	金	8
山之内	1	FP	福井	0
小松	0	FP	尹	9
(1)	19	PT	(4)	28

〔審・島崎 井上〕

大和銀行 23 〔14―11 9―11〕 22 北国銀行

〔戦評〕前日、立石電機を接戦の末破った北国と初の決勝進出を狙う大和の闘いは、試合開始から1点を争う激戦となった。

エースシューター呉とパワフルなプレーを身上とする金の両韓国プレーヤーで展開をつくる北国と豊かな脚力を生かし、スピーディに走りまくる大和。両チームとも持ち味を生かし、最後まで予断を許さない接戦となったが、プレーの幅に少し上回る分だけ大和がリードした試合であった。

〔北国〕	得		〔大和〕	得
木戸	0	GK	増見	0
岩井	0	GK	簗田	0
上田	3	FP	丸田	5
林	3	FP	鈴木	5
丹後	2	FP	袰川	1
松田	2	FP	上村	5
矢野	1	FP	小池	2
塙	0	FP	藤本	5
金	6	FP	渡辺	0
森	0	FP	木瀬	0
谷本	0	FP	松田	0
呉	5	FP	瀬川	0
(3)	22	PT	(2)	23

〔審・上久保 北井〕

決勝

大崎電気 35 〔18―16 17―8〕 24 大和銀行

〔戦評〕前半、両チームともシュート数の多いゲーム展開であった。大崎は金と尹の圧倒的な得点源を基盤とし、多彩なシュートで得点をあげた。一方大和も丸田の積極的な攻撃で得点をあげ、前半戦は終始シュート合戦のまま終った。

後半に入り、大和は前半のリズムに乗り切れず、大崎のディフェンスを切り崩すことができずに攻撃が単調になった。しかし、一方の大崎は前半同様、金、尹の好リードと多彩なシュートでさらに得点をあげ、後半終了時には11点もの差をつけて大和に圧勝した。

〔大和〕	得		〔大崎〕	得
増見	0	GK	佐々木	0
簗田	0	GK	宗片	0
丸田	7	FP	森田	0
鈴木	1	FP	藤井	3
袰川	6	FP	前川	2
上村	3	FP	梅原	7
小池	3	FP	江口	1
藤本	1	FP	鷲宮	0
渡辺	0	FP	野田	1
木瀬	0	FP	金	12
松田	3	FP	福井	0
瀬川	0	FP	尹	9
(3)	24	PT	(5)	35

〔審・岡本 清水〕

第32回(女子25回)全日本学生選手権大会

日体大が男女アベック優勝を飾る

男子は10年ぶり9回目、女子は4年ぶり15回目

男子

1回戦

東和大 29（12—9, 12—15, 5—3）27 函館大

東海大 20（13—9, 7—9）18 愛媛大

法政大 24（12—10, 12—12）22 愛知学院大

名城大 25（14—8, 11—13）21 中央大

中京大 31（19—15, 12—12）27 東北学院大

慶応大 25（14—12, 11—9）21 福岡教育大

大阪体育大 42（23—6, 19—9）15 新潟大

国士館大 37（17—9, 20—10）19 桃山学院大

2回戦

日本体育大 37（17—11, 20—11）22 東和大

東海大 26（14—6, 12—16）22 同志社大

早稲田大 37（21—8, 16—14）22 法政大

名城大 29（6—11, 16—11, 7—4）26 大阪経済大

中京大 29（18—14, 11—11）25 筑波大

中部大 36（17—12, 19—15）27 慶応大

日本大 24（10—10, 14—10）20 大阪体育大

国士館大 34（15—14, 19—12）26 福岡大

準決勝リーグXゾーン

日体大 31（16—5, 15—8）13 東海大

〔戦評〕前半立ち上がり、日体大が続けてPTを決めて優位に立つ。東海大は日体大ディフェンスを攻めあぐみ、中盤全く得点が伸びず前半で16—5と大差がついて勝負が決まった。

後半に入っても日体大が着々と加点、リードを大きく広げて快勝した。

〔東海大〕		得
GK	茅原	0
GK	井上	0
FP	関口	1
FP	佐野	4
FP	鈴木	2
FP	白川	1
FP	荻原	4
FP	野崎	0
FP	村上	0
FP	磯辺	0
FP	小林	1
FP	志田	0
PT	(1)	13

（審・浅井・山本）

〔日体大〕		得
GK	比嘉	0
GK	糸井	0
FP	安達	5
FP	佐藤	0
FP	吉迫	3
FP	高木	7
FP	小橋	0
FP	堤	1
FP	積	2
FP	下地	7
FP	本庄	4
FP	佐藤	2
PT	(6)	31

早稲田大 36（18—7, 18—10）17 名城大

〔戦評〕早大が立ち上がりすぐに先制、着々と得点を加えて10分には7—2とリードを奪う。名城大も散発的に反撃を見せたが、得点力に差があり、18—7という大差で前半を折り返す。

後半に入り、立ち上がり10分間は名城大も互角に展開したが、中盤から再び早大がじりじりと点差を広げて名城を大差で圧倒した。

〔名城大〕		得
GK	剣持	0
GK	我謝	0
FP	貢	1
FP	小松	1
FP	山北	2
FP	横井	2
FP	遠藤	0
FP	金城	1
FP	二村	4
FP	上原	0
FP	本山	4
FP	日原	2
PT	(3)	17

（審・林・佐藤）

〔早大〕		得
GK	中嶋	0
GK	荒木	0
FP	大橋	7
FP	猪田	0
FP	大中	5
FP	大村	11
FP	菰原	5
FP	河野	0
FP	鳥平	4
FP	原	0
FP	岩本	4
FP	中野	0
PT	(3)	36

東海大 20（11—10, 9—9）19 名城大

〔戦評〕前半立ち上がり、東海大・佐野が10分間で5点をあげる活躍で6—3とリードを奪う。しかし、名城大も金城のシュートなどでじりじりと追い上げ、11—10と東海大の1点リードで折り返す。

後半開始早々名城大が同点とし以後一進一退の展開となる。全く互角の展開から残り2分から東海大が連続得点をあげ、粘る名城大を辛くもふり切った。

〔名城大〕		得
GK	剣持	0
GK	我謝	0
FP	貢	1
FP	小松	0
FP	山北	1
FP	横井	3
FP	遠藤	0
FP	金城	4
FP	二村	4
FP	上原	0
FP	本山	2
FP	日原	4
PT	(0)	19

（審・浅井・山本）

〔東海大〕		得
GK	茅原	0
GK	丹上	0
FP	関口	2
FP	佐野	10
FP	鈴木	3
FP	白川	2
FP	荻原	1
FP	野崎	0
FP	村上	0
FP	磯辺	0
FP	小林	2
FP	志田	0
PT	(2)	20

日体大 26（13—11, 13—14）25 早稲田大

〔戦評〕前半、中盤までほぼ互角の展開。日体大が残り9分から連続得点をあげて2点をリードして前半を終る。

後半立ち上がり、早大が5点を連取して一気に逆転する。しかし中盤日体大も追い上げ、15分に追いつくとすぐに再逆転、終盤早大の猛追を受けたが、辛くも1点のリードを守って逃げ切った。

〔早大〕		得
GK	須藤	0
GK	荒木	0
FP	大橋	2
FP	猪田	0
FP	大中	2
FP	大村	9
FP	菰原	4
FP	河野	0
FP	鳥平	3
FP	原	1
FP	岩本	4
FP	中野	0
PT	(2)	25

（審・岡本・清水）

〔日体大〕		得
GK	比嘉	0
GK	糸井	0
FP	安達	3
FP	佐藤	0
FP	吉迫	0
FP	高木	5
FP	小橋	0
FP	積	6
FP	下地	8
FP	本庄	3
FP	佐藤	1
FP	吉田	0
PT	(2)	26

早稲田大 35（18—10, 17—11）21 東海大

〔戦評〕前半立ち上がり東海大が健闘、20分まで8—8と互角の展開、ところが、この残りの10分で早大が立て続けに得点、一気に18—10と大差をつけた。

後半に入っても早大のリズムが続き、着々とリードを広げてふり切った。

〔東海大〕		得
GK	茅原	0
GK	井上	0
FP	関口	4
FP	佐野	9
FP	鈴木	1
FP	白川	3
FP	荻野	1
FP	野崎	0
FP	村上	0
FP	磯辺	1
FP	小林	1
FP	志田	1
PT	(5)	21

（審・飼沼・楓）

〔早大〕		得
GK	中嶋	0
GK	荒木	0
FP	大橋	5
FP	猪田	2
FP	大中	8
FP	大村	6
FP	菰原	4
FP	河野	0
FP	鳥平	4
FP	岩本	6
FP	延命	0
FP	中野	0
PT	(4)	35

日体大 33（14—7, 19—9）16 名城大

〔戦評〕前半ほぼ互角の展開から中盤を過ぎて日体大が連続得点を

あげてリードを奪い、14—7で前半を終る。
後半に入り、日体大は全員がムラなく得点をあげて大量得点をあげ、大きくリードを広げて圧勝した。

	名城大	得	日体大	得
GK	剣持	0	比嘉	0
GK	我謝	0	糸井	0
FP	貢	0	安達	4
FP	小松	0	佐藤	2
FP	山北	1	吉追	2
FP	遠藤	3	高木	4
FP	金城	3	小橋	1
FP	二村	3	積	6
FP	上原	1	下地	5
FP	本山	4	本庄	3
FP	日原	0	佐藤	6
FP	藤野	1	滝川	0
PT	(0)	16	(1)	33

（審・浜田、小笠原）

〔順位〕①日本体育大②早稲田大③東海大④名城大

準決勝リーグYゾーン

中部大22 〔12—9 10—9〕 **18中京大**

〔戦評〕前半立ち上がり、両チーム共ロースコアの展開。20分を過ぎて中部大がリード、12—9で前半を折り返す。

	中京大	得	中部大	得
GK	秋田	0	石原	0
GK	光安	0	堀	0
FP	平良	0	堀田	5
FP	岩本	2	坂	3
FP	野口	0	植村	2
FP	松本	4	同前	0
FP	古谷	2	仲宗根	0
FP	岡部	6	吉浜	0
FP	斉藤	3	興儀	3
FP	酒井	0	内田	5
FP	横田	0	長嶺	4
FP	中山	1	長田	0
PT	(2)	18	(2)	22

（審・小友、谷藤）

後半も一進一退の互角の展開を見せ、前半のリードを保った中部大が逃げ切った。

日大26 〔14—8 12—6〕 **14国士館大**

〔戦評〕前半15分までは8—7とほぼ互角の展開を見せたが、それから15分間で国士館大は僅か1点という貧攻。日大が14—8と6点をリードして前半を終了。
後半も国士館大は攻め手を欠き、着々と加点する日大がさらにリードを広げて勝利を収めた。

	国士大	得	日大	得
GK	神田	0	堀江	0
GK	林田	0	鬼頭	0
FP	源内	3	雨宮	6
FP	林	4	田子	0
FP	小野	0	小河原	5
FP	八尾	3	杉谷	0
FP	中里	2	渡辺	7
FP	小野	1	山田	1
FP	又吉	0	丹羽	4
FP	竹林	0	西岡	3
FP	寺尾	0	加藤	0
FP	田中	1	井手	0
PT	(1)	14	(3)	26

（審・浜田、小笠原）

日大32 〔17—7 15—13〕 **20中京大**

〔戦評〕前半立ち上がり7分間中京大は無得点。この間に日大は7点をあげて7—0と一方的にリード。その後中京大も反撃を見せるが反則が多く、結局17—7と大差で前半を終了。
後半は両チームほぼ互角の点のとり合いとなったが、日大が終盤立て続けに得点、前半の大量リードを守って逃げ切った。

	中京大	得	日大	得
GK	秋田	0	堀江	0
GK	光安	0	鬼頭	0
FP	平良	1	雨宮	7
FP	岩本	0	田子	1
FP	野口	1	小河原	5
FP	松本	3	杉谷	0
FP	古谷	5	渡辺	5
FP	岡部	4	山田	9
FP	斉藤	2	丹羽	4
FP	酒井	0	西岡	1
FP	横田	0	加藤	0
FP	中山	4	井手	0
PT	(2)	20	(4)	32

（審・照井、守屋）

中部大20 〔10—6 10—9〕 **15国士館大**

〔戦評〕前半互角の立ち上がりだったが、国士館大は中盤得点を伸ばすことができず10—6と中部大が4点をリードして折り返した。
後半は一進一退の互角の展開で前半をリードを保った中部大が勝利を収めた。

	国士大	得	中部大	得
GK	神田	0	石原	0
GK	林田	0	堀	0
FP	源内	6	堀田	6
FP	林	4	坂	3
FP	小野	2	植村	2
FP	八尾	0	同前	0
FP	中里	2	仲宗根	0
FP	小野	1	吉浜	0
FP	又吉	0	興儀	0
FP	竹林	0	内田	7
FP	寺尾	0	長嶺	1
FP	田中	0	長田	1
PT	(0)	15	(3)	20

（審・大河原、池田）

国士館大28 〔13—12 15—10〕 **22中京大**

〔戦評〕前半立ち上がり国士館大が先制、10分過ぎには4—1とリードしたが、中京大も徐々に追い上げ、1点差で前半を折り返す。
後半立ち上がり1分、中京大が同点に追いつき、いったんは逆転したが、国士館大が中盤再びリード、終盤ダメ押し得点をあげて逃げ切った。

	中京大	得	国士大	得
GK	秋田	0	神田	0
GK	光安	0	林田	0
FP	平尾	4	源内	6
FP	岩本	6	林	7
FP	野口	0	小野	4
FP	松本	0	八尾	5
FP	古谷	1	中里	6
FP	岡部	7	又吉	0
FP	斉藤	3	竹林	0
FP	酒井	0	寺尾	0
FP	横田	0	寺嶋	0
FP	中山	1	田中	0
PT	(2)	22	(2)	28

（審・岡本、清水）

日大19 〔10—8 9—11〕 **19中部大**

〔戦評〕前半、中部大が先制。中盤一進一退の展開だったが、中部大に反則が目立ち、PT4本を決めた日大が10—8と2点をリードして前半を終る。
後半10分まで、前半のリズムで日大が快調に得点をあげ、16—10とリードを大きく広げたが、ここから全く得点が伸びず、残り5分を切って遂に17—17の同点に追いつかれ、終盤互いに譲らず結局19—19で引き分けた。

	中部大	得	日大	得
GK	石原	0	堀江	0
GK	堀	0	鬼頭	0
FP	堀田	2	雨宮	7
FP	坂	0	田子	0
FP	植村	0	小河原	2
FP	同前	0	杉谷	0
FP	仲宗根	0	渡辺	7
FP	吉浜	3	山田	2
FP	興儀	2	丹羽	1
FP	内田	9	西岡	0
FP	長嶺	3	加藤	0
FP	長田	0	井手	0
PT	(3)	19	(5)	19

（審・小友、谷藤）

〔順位〕①日本大②中部大③国士館大④中京大

3位決定戦

早稲田大32 〔17—6 15—16〕 **22中部大**

〔戦評〕前半立ち上がりから早大の菰原、鳥平らが快調にシュートを決め大きくリードを奪う。一方の中部大は、早大ディフェンスを攻めあぐみ、得点が伸びない。17—6と早大が大きく差をつけて前半を折り返す。
後半に入っても早大は全員がムラなくシュートを決めて得点を伸ばす。中部大も終盤激しく追い上げたが、前半の点差が大きく、及ばなかった。

	中部大	得	早大	得
GK	石原	0	中嶋	0
GK	堀	0	荒木	0
FP	堀田	10	大橋	6
FP	坂	0	猪田	0
FP	植村	1	大中	3
FP	同前	1	大村	4
FP	仲宗根	1	菰原	8
FP	吉浜	5	河野	0
FP	興儀	1	鳥平	9
FP	内田	1	原	0
FP	長嶺	0	岩本	2
FP	長田	2	中野	0
PT	(0)	22	(0)	32

（審・浅井、山本）

決勝

日体大25 〔12—8 13—13〕 **21日大**

〔戦評〕前半立ち上がり、日大・小河原が先制。日大が先行して進んだが、10分には日体大が4—3

と逆転、中盤から日大の攻撃を押え込み、12—8と4点をリードして前半を折り返す。

後半は日体大が先制したが、日大もすぐに返し、全く一進一退の互角の展開。終盤、日大の必死の追撃も前半の点差を縮めることはできず、日体大がリードを守って実に10年ぶりの優勝を飾った。

得	〔日大〕		〔日体大〕	得
0	堀江	GK	比嘉	0
0	鬼頭		糸井	0
4	雨宮	FP	安達	2
1	田子		佐藤	0
6	小河原	（審・浜田・小笠原）	吉迫	0
0	杉谷		高木	6
3	渡辺		小橋	1
0	山田		積	8
2	丹羽		下地	3
5	西岡		本庄	3
0	加藤		佐藤	2
0	井手		吉田	0
21	(4)	PT	(2)	25

女子

1回戦

東女体大39（20—8、19—4）12大教大

中京女大23（14—10、9—11）21東北福祉大

筑波大32（19—4、13—3）7広島大

東海大23（11—11、12—11）22福岡大

日体大29（14—11、15—10）21中京大

大体大35（18—4、17—1）5岩手大

日女体大35（18—14、17—10）24福教大

武庫川女大56（25—4、31—3）7富山大

準決勝リーグXゾーン

東女体大28（14—5、14—10）15中京女大

〔戦評〕前半立ち上がり、東女体大・田鹿がPTで先制。その後も優位に展開、中盤中京女大も反撃するが、14—10と東女体大が4点をリードして折り返す。

後半も東女体大は着実に加点、一方の中京女大は立ち上がりこそ互角の攻防を見せたものの中盤攻め手がなく、大きく引き離されてしまった。

得	〔中京女〕		〔東女体〕	得
0	佐藤	GK	蒔田	0
0	榊原		松山	0
6	林	FP	佐藤	1
1	星野		田中	0
4	豊田	（審・星川・佐東）	伝法谷	2
0	長田		藤塚	1
0	永谷		竹野	3
0	桧林		田鹿	6
0	陰		吉野	0
3	国枝		井口	1
1	八田		日比野	7
0	永野		本橋	7
15	(0)	PT	(2)	28

筑波大21（13—7、8—5）12東海大

〔戦評〕前半立ち上がり、両チームとも攻めあぐね、初得点は5分過ぎ。東海大は実に11分まで無得点で、8—5と筑波大が3点をリードして前半を終った。

後半に入っても試合の流れは変わらず、筑波大がじりじりと点差を広げてふり切った。

得	〔東海大〕		〔筑波大〕	得
0	前川	GK	山下	0
0	田口		樫山	0
2	遠藤	FP	大塚	3
3	小暮		磯山	3
5	長崎	（審・飼沼・楓）	小野島	0
0	土谷		白鳥	2
1	成田		海士部	0
0	佐藤		中山	3
1	清水		林	3
0	小沢		加古川	0
			中沢	1
			柳内	6
12	(3)	PT	(4)	21

東海大19（11—8、8—10）18中京女大

〔戦評〕前半、中京女大が好調な立ち上がりを見せ、3点を連取。しかし、東海大もPTを決めるなど中盤反撃、20分には7—7の同点となる。終盤中京女大が追加点をあげて10—8と2点をリードして折り返す。

後半、中京女大がいい立ち上がりを見せて6分過ぎには15—9と6点のリードを奪う。ところが、ここから中京女大は全く得点が伸びず、逆に残り10分を切ってから東海大が猛反撃、遂に残り2分には逆転に成功、1点差で勝利を飾った。

得	〔中京女〕		〔東海大〕	得
0	佐藤	GK	前川	0
0	榊原		田口	0
3	林	FP	遠藤	0
3	星野		小暮	10
5	豊田	（審・林・佐藤）	長崎	0
0	長田		土谷	0
0	水谷		成田	2
0	桧林		佐藤	2
3	陰		清水	4
3	国枝		小沢	1
1	八田			
0	水野			
18	(2)	PT	(2)	19

東女体大27（12—11、15—8）19筑波大

〔戦評〕前半、先制したのは筑波大だった。しかし、中盤から東女体大が順調に得点を伸ばし、15—8と7点をリードして前半を終了。

後半は互いに一進一退の展開で全く互角、筑波大も懸命の反撃を試みるが点差を縮めるまでには至らなかった。

得	〔筑波大〕		〔東女大〕	得
0	山下	GK	蒔田	0
0	樫山		村山	0
3	大塚	FP	佐藤	4
1	磯山		川西	0
0	小野島	（審・小友・谷藤）	伝法谷	3
4	白鳥		藤塚	1
2	海		竹野	5
6	中山		田鹿	6
1	林		吉野	0
0	加古川		井口	0
0	中沢		日比野	6
2	柳内		本橋	2
19	(0)	PT	(1)	27

筑波大27（14—6、13—8）14中京女大

〔戦評〕前半、筑波大がムラなく得点、中京女大も国枝を中心に反撃を試みるが、じりじりと引き離され、13—8と5点差で折り返す。

後半、中京女大に反則が多く、筑波大はPTなどで着々と加点、点差を大きく広げて勝敗を決した。

得	〔中京女〕		〔筑波大〕	得
0	佐藤	GK	山下	0
0	榊原		樫山	0
1	林	FP	大塚	4
3	星野		磯山	0
0	豊田	（審・大河原・池田）	小野島	2
0	長田		白鳥	3
0	水谷		海士部	4
0	桧林		中山	3
1	陰		林	5
2	国枝		加古川	3
7	八田		中沢	3
0	水野		野村	0
14	(2)	PT	(5)	27

東女体大26（16—7、10—5）12東海大

〔戦評〕前半、お互いに攻めあぐねたような展開だったが、東女体大が少しずつリードを広げ、10—5で前半を終る。

後半に入って、東女体大は田鹿、竹野らが着々と加点、大きくリードを広げて勝敗を決した。

得	〔東海大〕		〔東女体〕	得
0	前川	GK	村山	0
0	田口		今野	0
1	遠藤	FP	佐藤	2
4	小暮		伝法谷	5
1	長崎	（審・浅井・山本）	藤塚	1
2	土谷		竹野	4
0	成田		田鹿	7
2	佐藤		藤	1
2	清水		井口	0
0	小沢		田島	0
			日比野	3
			本橋	3
12	(2)	PT	(6)	26

〔順位〕①東京女子体育大②筑波大③東海大④中京女子大

準決勝リーグYゾーン

日体大26（16—11、10—7）18大体大

〔戦評〕前半、日体大・若林のPTで先制。その後も終始日体大が先行して10—7と3点差で前半を終了。

後半も立ち上がりから日体大が

着々と加点、リードを広げる。終盤、大体大も懸命の反撃を見せたが、すでに点差は大きく、及ばなかった。

得	〔日体大〕		〔大体大〕	得
0	松永	GK	松本	0
0	小松崎	GK	梅原	0
7	市来	FP	藤原	0
2	小間	FP	飯田	2
2	小島	FP	五島	2
1	小林	FP	鷲見	0
2	児玉	FP	成沢	3
3	竹吉	FP	竹内	1
2	後藤	FP	比嘉	8
2	若林	FP	冨着	0
2	桐谷	FP	増永	2
3	山田	FP	柿並	0
26	(1)	PT	(5)	18

（審・照井・守屋）

武庫川女大 20 〔11－10 9－7〕 17 日女体大

〔戦評〕前半、武庫川・西村、塩崎、日女体大・執印らが激しく点を取り合い互角の展開で、終了間際に西の得点で武庫川が1点をリードして前半を終える。

後半開始早々、日女体大がすぐに追いついたが、その後一進一退の展開から中盤武庫川が抜け出し日女体大も終盤の追い上げがかみ合わず、武庫川が3点差で逃げ切った。

得	〔武庫川〕		〔日女体〕	得
0	喜多	GK	西郷	0
0	牧	GK	宇井	0
6	塩崎	FP	増田	0
6	西村	FP	板尾	0
0	水村	FP	北島	3
2	篠原	FP	竹原	1
2	永井	FP	染谷	0
0	和田	FP	真名子	1
4	西	FP	三村	0
0	橋崎	FP	柳原	0
0	高浪	FP	佐藤	6
0	西村	FP	執印	6
20	(4)	PT	(4)	17

（審・岡本・清水）

日体大 28 〔15－6 13－10〕 16 日女体大

〔戦評〕前半、日女体大は日体大のディフェンスを攻めあぐみ、得点が伸びない。一方、日体大は全員がムラなく得点、15—6と前半で大差をつけた。

後半も日体大のペースは変わらないが、日女体大も執印を中心に反撃、ほぼ互角の展開を見せた。

得	〔日体大〕		〔日女体〕	得
0	松永	GK	西郷	0
0	小松崎	GK	宇井	0
2	市来	FP	増田	0
4	大間	FP	板尾	0
5	小島	FP	北島	2
3	小林	FP	竹原	1
0	児玉	FP	染谷	0
7	竹吉	FP	真名子	3
0	後藤	FP	三村	0
3	若林	FP	柳原	1
4	桐谷	FP	佐藤	1
0	山田	FP	執印	8
28	(3)	PT	(5)	16

（審・飼沼・楓）

武庫川女大 26 〔16－4 10－13〕 17 大体大

〔戦評〕前半、互いに固い立ち上がりだったが、武庫川がリズムに乗ると着々と得点を伸ばし、大体大の反則もあってPTで5得点をあげるなど16—4と前半で大量リードを奪った。

後半は、立ち上がり互角の展開だったが、中盤から大体大が追撃じりじりと点差を縮めたが、前半の点差が大きく及ばなかった。

得	〔武庫川〕		〔大体大〕	得
0	喜多	GK	松本	0
0	牧	GK	梅原	0
2	塩崎	FP	藤原	0
4	西村	FP	飯田	1
3	篠原	FP	五島	0
0	千秋	FP	鷲見	0
6	永井	FP	田中	0
0	松浦	FP	成沢	2
1	和田	FP	竹内	1
5	西	FP	比嘉	7
0	高浪	FP	冨着	2
4	西村	FP	増永	4
26	(5)	PT	(2)	17

（審・浜田・小笠原）

日体大 22 〔8－8 14－8〕 16 武庫川女大

〔戦評〕前半、武庫川は立ち上がり日体大のディフェンスを攻めあぐみ、初得点は12分過ぎ。この間に日体大は5点をあげ5—1とリード。しかし、ここから武庫川が西村のシュートなどで反撃、逆に日体大は得点を伸ばすことができず、8—8の同点で前半を終了。

後半、武庫川がPTで先制したものの、中盤から日体大の攻撃が上回り、着々と点差を広げて日体大が押し切った。

得	〔日体大〕		〔武庫川〕	得
0	松永	GK	喜多	0
0	小松崎	GK	牧	0
2	市来	FP	塩崎	5
3	大間	FP	西村	5
4	小島	FP	木村	0
3	小林	FP	藤原	0
1	児玉	FP	永井	0
3	竹吉	FP	松浦	0
0	後藤	FP	和田	0
2	若林	FP	西	1
1	桐谷	FP	高浪	1
3	山田	FP	西村	4
22	(2)	PT	(6)	16

（審・飼沼・楓）

大体大 25 〔10－14 15－8〕 22 日女体大

〔戦評〕前半、大体大が先制。しかし、中盤から日女体大が着々と得点を伸ばし、14—10と4点をリードして前半を終了。

後半、立ち上がりはほぼ互角の展開を見せたが、10分過ぎから大体大のペースとなり、20分には20—20の同点に追いつき、終盤一気に加点して逆転勝ちを収めた。

得	〔日女体〕		〔大体大〕	得
0	風間	GK	松本	0
0	宇井	GK	梅原	0
2	増田	FP	藤原	0
0	板尾	FP	飯田	5
3	北島	FP	黒田	0
4	竹原	FP	五島	3
0	染谷	FP	鷲尾	2
3	真名子	FP	成沢	6
1	三村	FP	竹内	2
0	柳原	FP	比嘉	5
3	佐藤	FP	冨着	1
6	執印	FP	増永	1
22	(4)	PT	(1)	25

（審・照井・守屋）

〔順位〕①日本体育大②武庫川女子大③大阪体育大④日本女子体育大

3位決定戦

武庫川女大 16 〔7－6 9－8〕 14 筑波大

〔戦評〕前半ほぼ互角、一進一退の展開で、両チームともにPTの得点が目立つ。7—6と武庫川の1点リードで折り返す。

後半に入っても同様の展開で、武庫川が先行、筑波大が終盤追い上げを見せたが、僅かに及ばず、武庫川が辛くも逃げ切った。

得	〔武庫川〕		〔筑波大〕	得
0	喜多	GK	山下	0
0	牧	GK	樫山	0
7	塩崎	FP	大塚	2
2	西村	FP	磯山	0
2	木村	FP	小野島	0
1	篠原	FP	白鳥	4
0	千秋	FP	海士部	2
3	永井	FP	中山	1
0	和田	FP	林	1
0	西	FP	加古川	0
0	高浪	FP	中沢	0
1	西村	FP	柳内	4
16	(5)	PT	(4)	14

（審・大河原・池田）

決勝

日体大 23 〔12－11 11－9〕 20 東女体大

〔戦評〕前半、東女体大・田鹿の3連取でスタート。この3点差を中盤から日体大がじりじりと追い上げ、15分に6—5と逆転、結局12—11と1点をリードして前半を終了。

後半、東女体大は立ち上がり10分間得点をあげられず、日体大がリードを4点にまで広げる。その後、東女体大もリズムを取り戻し追い上げたが、僅かに及ばず、日体大が4年ぶり15回目の優勝を飾った。

得	〔日体大〕		〔東女体〕	得
0	松永	GK	蒔田	0
0	小松崎	GK	村山	0
5	市来	FP	佐藤	1
4	大間	FP	伝法谷	3
3	新田	FP	藤塚	0
3	小島	FP	竹野	0
0	小松	FP	田鹿	7
4	児玉	FP	吉野	0
2	竹吉	FP	井口	1
0	後藤	FP	田島	0
1	桐谷	FP	日比野	3
1	山田	FP	本橋	5
23	(3)	PT	(1)	20

（審・岡本・清水）

第7回女子ジュニア世界選手権大会報告

ソ連が韓国を降し優勝
—日本も善戦、10位となる—

9月22日からアフリカのナイジエリアで行なわれた第7回女子ジュニア世界選手権大会は、日本をはじめ15カ国が参加して熱戦を展開。ソ連が優勝を飾った。大会前にヨーロッパで合宿して大会に臨んだ日本チームは、強豪各国に善戦、10位という成績を収めた。

戦績

▼予選リーグ

○Aグループ

日本 23—17 西ドイツ
ソ連 31—21 日本
ソ連 38—20 西ドイツ
〔順位〕①ソ連②日本③西ドイツ

○Bグループ

スウェーデン 27—18 トルコ
ブルガリア 22—18 デンマーク
デンマーク 35—10 トルコ
ブルガリア 24—21 スウェーデン
ブルガリア 33—19 トルコ
スウェーデン 21—20 デンマーク
〔順位〕①ブルガリア②スウェーデン③デンマーク④トルコ

○Cグループ

中国 30—13 アルジェリア
韓国 37—25 オーストリア
韓国 37—16 アルジェリア
中国 28—12 オーストリア
アルジェリア 19—15 オーストリア
韓国 32—26 中国
〔順位〕①韓国②中国③アルジェリア④オーストリア

○Dグループ

スペイン 26—17 スイス
ユーゴスラビア 23—18 ナイジェリア
スペイン 20—19 スイス
ユーゴスラビア 31—22 スイス
ナイジェリア 32—16 スイス
ユーゴスラビア 25—17 スペイン
〔順位〕①ユーゴスラビア②スペイン③ナイジェリア④スイス

▼準決勝リーグ

スウェーデン 36—20 日本
ブルガリア 28—23 西ドイツ
ソ連 34—19 デンマーク
中国 27—13 スペイン
ユーゴスラビア 22—17 アルジェリア
韓国 35—25 ナイジェリア
ソ連 29—19 スウェーデン
デンマーク 24—16 西ドイツ
ブルガリア 23—16 日本
韓国 35—20 スペイン
ナイジェリア 28—15 アルジェリア
ユーゴスラビア 22—19 中国
ソ連 27—16 ブルガリア
スウェーデン 27—16 西ドイツ
デンマーク 22—20 日本
韓国 35—26 ユーゴスラビア
スペイン 28—16 アルジェリア
中国 30—24 ナイジェリア

▼13～15位決定リーグ

スイス 21—19 トルコ
オーストリア 30—21 トルコ
スイス 26—23 オーストリア

▼11・12位決定戦

西ドイツ 24—10 アルジェリア

▼9・10位決定戦

ナイジェリア 34—22 日本

▼7・8位決定戦

デンマーク 30—19 スペイン

▼5・6位決定戦

スウェーデン 27—26 中国

▼3・4位決定戦

ブルガリア 27—18 ユーゴスラビア

▼決勝

ソ連 26—23 韓国

〔順位〕①ソ連②韓国③ブルガリア④ユーゴスラビア⑤スウェーデン⑥中国⑦デンマーク⑧スペイン⑨ナイジェリア⑩日本⑪西ドイツ⑫アルジェリア⑬スイス⑭オーストリア⑮トルコ

戦評

〈9月22日〉
日本23—17西ドイツ

日本の完勝であった。このゲームは世界選手権のオープニングゲームということもあり、両チーム得点が入らず、15分経過して3—3といった重苦しい展開であった。しかしその後、日本チームは速攻が決まりだし、前半9—6で終えた。後半開始早々4連続得点をあげ、日本有利な展開となった。その後、着実に得点を重ね、一時は9点差まで広げ、エントリーメンバー全員をコートに送り出す余裕のあるゲーム運びができた。ユーゴでの一週間の遠征によって身長のあるプレーヤー、特にポストプレーヤーに対する守り方と速攻の有効性を認識したこと並びにレフェリーのジャッジに対する慣れ（日本のレフェリーのそれとかなり異なる、特に退場、ペナルティースローに対する基準がかなり異なる）が勝因になったと思われる。

〈9月23〉
日本21—31ソ連

ゲーム開始早々、5連続得点を許し、苦しいスタートとなった。今回のソ連チームは身長が高く（185cmクラスが4人はいた）、かつ技術的にもシュート力がある強力なチームで、この高さに戸惑った様子であった。しかし、日本チームも速攻やカット員による割り込みでPTを得、竹吉が確実に得点し、前半9—16で終えた。後半は終始得点を取り合い、白熱したゲームになった。特に、竹吉、日比野のステップシュートが決まり、場内を沸かせる展開になった。しかし、相手の攻撃も緩まず、結局12—15、トータル21—31で終った。後半、ディフェンスが前半に比べ、ピストンを素早く行ない、相手の攻撃を封じる場面もみられ、準決勝リーグにつながる収獲を得ることができた。日本チームの善戦であった。

〈9月26日〉
日本20—36スウェーデン

日本チームの完敗であった。前半、10分まで点を取り合い、4—4と競ったが、その後、全く攻守に生彩がみられず、10—17と一方的なスコアになってしまった。後半も前半同様の展開となり、日本チームの良いところが全くみられないゲームであった。敗因としては、相手の速攻に対する帰陣が遅かったこと、防御でのとなりプレーヤーとのコンビネーションプレーが崩れ、集中したディフェンスができなかったこと、セットの攻撃ではゴールへの動きが乏しく相手のディフェンスを崩すことができなかったことなどが挙げられよう。

外国チームと対戦するときの日本チームの宿命であろうが、プレ

ーヤーの運動量が乏しくなったときにはどうにもならないことが改めて再認識された。戦術的な問題はともかく、いつもゴールを狙う積極性、気力の充実が日本チームの重要な課題になろう。

〈9月27日〉
日本16―23ブルガリア

前日のスウェーデン戦同様、ゲーム開始早々連続得点を許し、10分間で4―0とリードされた。このまま、ずるずると一方的なゲーム展開になるのではないかと心配されたが、今日はディフェンスがピストンとカバーリングを徹底して行なったために、相手に容易に得点を許さず、内容のある展開になった。しかし、攻撃はスウェーデン戦同様攻めあぐみ、前日よりは突破の意欲がみられたものの、前半6点でとどまった。しかし、後半は攻撃がふんばりを見せ、45度のサイドへの突破やサイドシュートなどで得点を挙げ、さらに、速攻も決まりだし、後半は10―9で勝ち越すことができた。終始、粘りのあるディフェンスができたことは次の対戦チームであるデンマーク戦に希望を与えるものであった。

〈9月29日〉
日本20―22デンマーク

この一戦に勝てば、7、8位決定戦進出ということもあり、このデンマーク戦に日本チームのすべてをぶつけようとする意気込みが試合前からみなぎり、気力充実してゲームに臨んだ。これまでの試合同様、高いディフェンス網にてこずりながらも、谷本、日比野、竹吉らの活躍で前半8―11で終った。後半、谷本のステップシュートや速攻が決まり、16分には15―15と振り出しに戻し、その後得点の取り合いで白熱したゲームとなった。二度勝ち越す場面があったが、23分経過後、相手に3連続得点を許し、追撃空しく2点差で敗れてしまった。特に、ディフェンス陣の頑張りがめだち、後一歩のところまで迫っただけに悔しい敗戦であった。

しかし、選手たちはゲームの中で一つのプレーの厳しさやミスをしないことの重要性が今まで以上に理解できる意味ある体験をしたと思われる。

〈9月30日〉
日本22―34ナイジェリア

日本チームは9、10位をかけての最終戦であった。前半15分までは得点を取り合い、5―5と白熱したゲーム展開であった。その後、両チームミスが目立ち始め、荒っぽいゲーム展開になり、体格に劣る日本チームにとっては苦しい状況に追い込まれた。それでも、柳内などの活躍で前半11―14で終えた。後半、ナイジェリアチームの力強い攻撃にディフェンスがついていけなくなり、一方的な展開になってしまった。日本チームは外国チームと対戦する場合、体格的なハンディを背負って戦わなければならないが、これを少しでも補うためには、気力ある攻防を行なうことがその前提になる。今日のゲームは、特に後半に選手たちが集中力を欠いた空白の時間を招いたのは残念であった。

団長　鈴木　義男

日本からはるかに遠く未知に近い国であるナイジェリアで第7回世界女子ジュニア選手権大会が行なわれた。もちろん、ハンドボールのワールドチャンピオンシップがアフリカ大陸で開催されるのは初めてでもある。私は今度の日本選手団に同行の連絡を受けたのが出発間近かの2週間もなく、予防注射やら事前準備に手間どり、何の予備知識も持たずに東京に集合し出発することになった。選手団は国内スケジュールの都合で事前合宿ができなかったので、ヨーロッパで試合も兼ねて調整合宿を行なうためユーゴスラビアに飛んだ。

ザグレブ空港から120kmぐらい離れたのどかな田舎町コプリビニッツァに投宿して近くの町のクラブチームと3試合を行ない、2勝1敗の成績をあげヨーロッパチームとの対応にも馴れて最高に近いコンディションで本大会に乗り込む準備ができた。この1週間は適度の期間であり、落ち着いた雰囲気の中で集中練習ができたことは、現地関係者の日本チームに対する配慮の賜物と思う。10月20日ザグレブ空港を正午に飛び立ってからが強行スケジュールで、ロンドンまで引き返して空港で7時間待機、夜9時半出発して明くる朝7時半ナイジェリア首都ラゴスに着いたが、国内線で5時間待たされ、やっと内陸部のジョス空港着。それからバスでサバンナ地帯を2時間近く走り、会場地バウチ市のホテル着が夕方になり、全員クタクタの状態。しかも明日の第1戦が10時から照準をしぼっている西独戦であり、選手団はコンディション問題に戦々恐々の有様。

会場地バウチ市は海抜800mの高地で広大な草原地帯で気候も良く、ホテルも国際級であった。大会運営は軍隊の力を利用し、国をあげての精一杯の努力が見られ、各国への配慮も行き届いていた。しかし、施設面ではトラブルが多く、停電して試合が中断したりホテルのエレベーター故障で中にとじ込められたり、また体育館に得点掲示板もなく、急拠黒板を運び込んでチョークで得点を書き入れるなど前代未聞の大会である。時間の遅れなど日常茶飯事で、待つことに苦痛を感じないこちらの人々の生活に順応しなければいられない所である。

ホテルから体育館までバスの中から町をながめる程度で町を散歩

することも治安問題でむずかしく、飲食物や蚊などからの病気の不安がつきまとい、また試合中の選手のケガ続発など、今回ほどチームドクター不在の遠征がいかに苦しいか、ましてドクター不帯同は日本チームだけであるだけに、ドクター軽視はあまりにも問題が大きいことを痛感する。

ジュニア大会は、今後の各国の実力動向が把握できるだけに楽しい興味ある大会である。さすがに各国ともゲームの内容はきびしく、威信をかけての意気込みには見応えがあった。試合内容や技術問題は、コーチングスタッフの報告にゆずるとして、選手たち全員アクシデントの多い中で良く頑張り、予選グループを2位で突破、トータル10位を獲得できたことは努力の成果ではないかと思う。

この遠征に際して日本協会をはじめ関係チームの方々及び現地の日本大使館、商社等いろいろご指導いただきまして無事全員帰国できたことを厚くお礼申し上げます。

監督　山崎　武

第7回女子ジュニア世界選手権大会が去る9月22日から10日間、アフリカ・ナイジェリアのバウチ州で開催された。それに先立ち、ユーゴスラビアで5日間の合宿を行ない大会に臨んだ訳であるが、この遠征を振り返っての所感を記してみたい。

日本チームは、過去3度大会に参加している。私は今回を含め3度この大会に参加する幸運に恵まれた。

参加15カ国（オランダ棄権）によって競われた覇権争いも、ソ連の圧倒的な勝利で幕を閉じた。日本もまた、予戦リーグを突破し、7位目標に準決勝リーグに進むも、世界の壁は厚く10位に甘んじた。

国際試合経験の少ない日本ジュニアチームにとって、この6試合は今後の選手たち、スタッフにとって大きな収獲と教訓を得た。

少なすぎる国際試合

プログラムに記載された各国ジュニアの公式国際試合数は、中国14試合、デンマーク13・5試合、西ドイツ18試合、スペイン15試合、他国はもっと多いと予想されるが、いずれも日本の2・4回を大きく上回っている。ユーゴでの3試合の練習マッチが今回の日本ジュニアチームにとって初の欧州人との闘いであり、もし、この合宿での情報と経験がなければ、10位はおろか予選リーグ突破も困難であったと推察される。

特に各国とも、ジュニアの域を出た選手（ナショナル）が必ず1〜2人おり、彼女たちの試合数は平均30回である。

中国のShi Weiにいたってはさらに51試合消化している。地域のハンディは致し方ないにせよ、せめてもう少し国際試合を経験できないだろうか。中国にいたっては、国のスポーツ方針が親善から勝利へと変ったにせよ、今回もまた、ジュニア9人が直接アフリカからルーマニアに入りナショナルと1カ月の合宿をこなすと聞くにつけ、その実践力、行動力には驚かざるを得ない。

速攻中心の攻撃へ

戦術面で感じたことは、各国とも（ユーゴを除く）速攻を武器として闘っていたことである。

優勝したソ連、2位韓国は、予選、準決勝リーグ共に30を越える得点力を有した。韓国にいたっては決勝戦を除いて全試合35得点をあげ、その大半が速攻によるものであったことはいうまでもない。

積極的なディフェンスシステムからミスを誘い速攻へつなげる、最も効率のよい攻撃パターン〝速攻〟が改めて見直された大会でもあった。また、ソ連、韓国、ブルガリア、デンマーク、中国が高い個人能力を生かし、一瞬のディフェンスのすきをついてのシュート、フェイントからのカットイン攻撃は、セットオフェンスでの「速い攻め」であり、得点への貪欲さを感じた。

今後、体格的に不利な日本チームは、時間経過に伴う体力消耗と相まり、ますます苦戦をしいられるであろう。

よく競技した日本チームと今後

ヒト、カネ、モノがない日本のアマチュアスポーツ界にとって今後世界に立ち向かっていくには、どうすればよいのかという点は、ハンドボール界に限らず他の競技においてもよく論議される所である。ただ一つ言えることは現場の力だけではどうにもならないということである。

今回は選ばれた16名の選手たちは本当によく闘った。

地元観客、新聞社の熱狂的な応援のもと、ソ連、ブルガリア、デンマーク戦等、試合に敗れはしたものの、攻守の展開力、集中力を含めた心の勝負では一歩もひけを取らず、むしろ上回っていた。選手一人一人が2年間一貫して行なってきた戦術構想を良く理解し、自分の役割を確実に消化してくれました。竹吉、谷本のクイック、ブラインドシュートは確実なポイントをあげ、また、日比野のずらしからのシュートは常にキーパーの逆をついて決まった。

生方、西村、上田のディフェンス力は充分外人選手に通用することも確認できた。

願はくば、今後体格の向上は時を待つとしても、前述した国際公式試合をジュニア時代から数多く経験させること。ジュニア・ナショナルを兼ねる選手が必要である

こと（将来チームの要として）。そして何よりも日本ハンドボールの技術体系の確立こそが大切であると痛感する。

ナイジェリアという国

赤道直上北緯5度に位置し、日本の2・5倍の国土、人口1億1千万、GNP200〜300ドル、石油、綿花、落花生を産出し、アフリカ黒人社会で一番豊な国といわれる軍事制権国家ナイジェリア。

裸足の物売りの横をベンツが走り抜ける。予想を越える自然の大きさ、得点板もない試合会場。会場をスプレーで追い払われる一般人。飛行機が飛ばず引き返したオランダチーム。軍用機の下で12時間待った韓国チーム。何らすべて問題なしと平然としている組織委員会。この国では〝待つ〟という言葉はないらしい。

そんな国での世界大会。9月12日から約3週間の遠征中において2度と訪れることのないであろう国アフリカを認識したのは3000kmのサハラ砂漠を横断している時であった。

コーチ　土井秀和

この大会に参加するに当たって私には二つの目的があった。一つは、我々スタッフはこのジュニアチームを単なる選抜チームではなく、まとまった一つのチームに育てようと、攻撃、防御の戦術構想を選手たちに提示し、構想実現のために2年間の活動を行なってきた。この活動の成果が世界の檜舞台でどのように発揮されるものかを確かめたいという点であった。二つには、女子ハンドボール界の世界の動向や発展方向を探りたいという点であった。

大会を終えて、思い浮かぶ感想を述べてみたい。

我々ジュニアチームは10位という成績に終わったが、今大会に参加したチームの実力はだいたい4グループに分けることができた。まずは、優勝を争ったソ連、韓国チーム、この両チームは参加チームの中で図抜けていた。次に、ブルガリア、ユーゴ、スウェーデン、中国チームで、技術的にも戦術的にもしっかりしたハンドボールを行ない、チームカラーを持っていた。デンマーク、スペイン、ナイジェリア、日本チームは同じようなレベルであった。最後に、西ドイツ、アルジェリア、スイス、オーストリア、トルコチームは、技術、戦術的にも少し劣る印象を持った。

上位の6チームはユーゴを除いて、速攻を攻撃における重要な戦術として位置づけ、積極的に多用していた。ソウル・オリンピック以降の変化として、女子ハンドボール界においても速攻の重要性が一層増している。さらに、各チームは攻撃で展開のきっかけとなる基本的な動きを2、3種類持っており、それに基づいて各個人の能力を生かした個人戦術、グループ戦術を利用していた。この点では、我々もジュニアチームに同様の指導をしてきたので、我々の採った考え方に誤りはなかったと確信している。しかし、その構想を実現するに足る個人の能力をいま一つ高めることができなかった点は今大会ではっきりと証明されたので、今までの指導に対する反省としてあげられよう。

防御に関しては、6—0防御や3—2—1防御、5—1防御などが採用されていたが、特別に戦術的に目を見張るようなプレーはみられなかった。

現在の日本チームの強化の方策から推察して、5、6位あたりを狙えるチームづくりが限界であろうと思えるが、この目標を突破するのは必ずしも無理な相談ではないという感想を持った。日本チームの体格的なハンディは当然のことながらいつも重くのしかかるが、戦術構想をよく理解してスピーディな動きをベースに個人の能力を一層高めることができるならば、課題は達成できるだろう。決して、日本チームの上位進出は夢ではない。しかし、この夢を実現するためには、今まで以上に強化合宿をこなし、選手に負荷をかけることが必要になろう。さらに、外国遠征等による国際経験を一層積むことがその前提にもなるだろう。協会の積極的な支援を望むものである。

最後に、プレーに対する基準の違い、レフェリングについて取り上げてみたい。この大会に参加して、レフェリーのプレーに対する判定基準が随分と日本と異なっているという印象を持った。特に、ペナルティースロー、チャージング、オーバーステップ、退場などの基準である。もちろん、これらのプレーに対する判定のベースはルールブックであり、これらの解釈は異なるものではないだろうし、日本には日本の考え方や主張があるだろう。しかし、外国に行ってプレーの判定に選手が戸惑うようでは、試合でハンディを背負って戦うようなものである。少なくとも、普段の練習の中にこれらの判定の基準をベースにしたトレーニングが行なわれないことは、試合で勝つことも難しくなる。試合は練習で身につけたプレーの表現であるからである。ことわっておくが、これらのプレーに対する判定の基準が世界選手権の時だけならばこのようにも述べないが、この大会前にユーゴで行なった試合でも同様の経験をした。これらの事実から推察して、ヨーロッパでは共通の認識があるのではないかという印象を持った。

冒頭基調講演

エリック・エリアス（スウェーデン）
IHF／PRC委員長

第19回レフェリー部門シンポジウムに世界各国の審判部長ならびに、そのエキスパートの参集を見てPRCとして無上のよろこびに思う。

4年前にポルトガルのカスカイスで、そして1987年にはコーチ部門と合同でフランスのストラスブルグでシンポジウムを開催した。

これらのシンポジウムで各審判部長諸氏から示唆されたいろいろなアイデアに関する討論は、PRCの業務にとって価値ある貢献をしてくれたばかりでなく、ルールとレフェリングについても我々の考えをより一層進展させる上で有力な票数を得た思いである。

バルセロナルールについて

一つの例として、私はストラスブルグで発表された意見について述べたいことは、1989年をルール改正の年としなかったことを第一にあげたい。諸氏が知る通り、ストラスブルグでは、例のバルセロナルールという型でのルール改正について討議が行なわれた。

この討論で、コーチやレフェリーは現行のルールで満足しており、すでに彼らは我々の求める型のハンドボールのやり方を持っておる（この点はストラスブルグで特に強調された）。しかもまだ技術的戦術的可能性の完全利用にいたっていないとして、現行のルールに説明解説を新たに付加することだけで、1989年にルール改正はやらないという線でIHFに提案することになった。IHF総会は、この件の決議案を採択可決しソウルでのコングレスに報告した。今後新しい説明解説を8月1日発効をめざして分析を行なう。

しかしながら、今回我々は現在のルールが過去4年間で一応満足的なものとして今後使用を継続することとなったが、それが最良最適を意味しているとは言えない。我々のハンドボールは、プレイヤーだけでなく観衆にとっても、マスメディアにとっても、スポンサーにとっても、現在は勿論のこと、将来にわたって常に人々を楽しませるものであり、魅力的なものでなければならない。我々は常にこの上昇気運の継続維持を忘れてはならず、合わせて今後も論議される新しいアイディア開発に積極的でなければならない。

これが現代のハンドボールの置かれた状況である。なんとなれば、PRC（規則審判委員会）として我々はレフェリングの基礎に関することに責任をもち、ここでの最も難しい問題である。常に千変万化のなまの題材要素を相手としているのであり、それによって所期の方針でハンドボールの発展を促進すべきであると考えている。

この会合は、単にレフェリートレーニングのシンポジウムに提供されたチャンスというだけでなく、このテーマが中心となっている時間表では、3つのトピックス別に分けられ、基礎トレーニング、拡大向上トレーニング、エリートトレーニングがそれである。加えて我々は、特別トレーニングでの多くの事例についても討論を準備している。

このシンポジウム実施にあたって、ストラスブルグで発表された諸氏の批評内容をとりあげて、グループ活動のための十分な時間をとるように計画した。

レフェリートレーニングについて

なぜレフェリーはトレーニングするのか?。それは我々が可能な限りベストレフェリーを必要とするからという簡単な理由から、当然訓練を積んだレフェリーの方が、そうでないレフェリーよりベターであるというだけである。

我々はこの際、いくらか批判的ではあるが、レフェリーのパフォーマンスが1986年の男子A世界選手権大会（スイス）では今までの最高レベルに達し、そしてソウルでオリンピック大会では沈滞傾向を見せていることを確認せざるを得ない。我々は、このようなありさまを容認できない。我々は、本来の道を進むための新しい方向を発見すべきである。勿論今すぐにこのテーマで本題に入るわけではないが、私としてはレフェリーの拡大向上トレーニングの必要性を強調せざるをえないのである。我々PRCとしては、レフェリーのスクーリングを助けるには限られた機会しかない―それは各国の国内問題である―けれども諸氏の努力についてはできるだけサポートする用意がある。我々としては、いつでも国内または地域のレフェリーコースに参加する用意はしているが、IHFのイベント大会へのレフェリーの準備については、それぞれの国の責任でやってもらうことを期待している。

国際レフェリー登録について

過去4年間でPRCは国際レフェリーリスト規定とライセンスAに対しての公式レフェリーコース規定を発表したが、これらは総会の承認を経たものである。そこで私が強調したいのは、IHFレフェリー公式リストに毎年登録されるレフェリーは、国内の審判部長から、その資格を具体的に保証されなければならないということである。これは、とかくその登録が信頼性に乏しいように我々は受け取っているからである。こんなことでは、IHFは個々のIHFレフェリーの実力アップについて各審判部長をその責任から解放することは不可能である。年次登録にあたって諸氏はレフェリーが身体的にも知的にも良いコンディションにあって、なおかつ定期的に研修しており、そしてまたそれぞれの国内試合でその能力を現に示している者であることをIHFに保証すべきである。

そしてまたこれは、問題視されているIHFレフェリーの年次登録を絶対的に確実なものとするために、それらの国のレフェリーの代表としての信頼性を備えた能力のあるレフェリーを用意するのは、のっぴきならない義務なのである。

どうか次の登録にあたっては、

書式の裏面を参照するなどして、すべての情報要素に留意してもらいたい。そして、5月31日までにバーゼルに届けられたい。

登録に際しての順位づけについて

審判部長諸氏にとって登録の際、IHF登録用紙に記載する「順位づけ」にも最大の注意をはらうように強調する。ある年あるポジションに到達していたレフェリーは、それ以後それを保つことができなかった。各国の各ペアは毎年国内で比較評価されているはずである。ここでは、IHFの観察報告書は観察チャンスそのものが極めて希であるために、何らの影響を支えるものとはならない。諸氏の知る通り、我々PRCにはゴッドファーザーシステムというものがあり、どこの国でもPRCのメンバーがその責任にあたっている。諸氏は、彼の助言忠告を聞くことが出来るうえ、所属レフェリーについても良く知ることが出来て、その上もっと多く助けてもらえるだろう。

一般的に言えば、IHFリストへの順位決定については国内レベルでの実技75%、国際試合の評価査定で25%の割合を基準としている。

しかし私としては、その国のIHFレフェリーについての審判部長諸氏の個人的判定が極めて重要であることも申し上げておく。順序づけをしたリストは国際的イベント大会へのレフェリー指名をするために必要不可欠のものである。

我々は、それぞれの国のレフェリーを良く知っているわけではないから、諸氏の順位づけを特に信頼せざるをえないのである。もし、PRCがその国の見解と相反することとなったときは、その国とこの問題を討議することとなるであろう。これは過去に何度かあったことで、問題のレフェリーの同意によりまるくおさまった。

レフェリー定年期限について

現行のレフェリー50歳定年制については検討されており、PRCとしては今回のシンポジウムでこの件に触れることは歓迎する。誰しもこの定年期限に疑問を持つことは自由であるが、何らかの期限は定めなければならない。ある者は52～55歳まで可能であっても、他の者は45歳でトップクラスにとどまれなくなるかも知れない。本当に正直に言って、審判部長たる諸氏がその国のレフェリーがすでに順位づけの対象とならなくなれば、IHFへのリストから除外することに疑いなく十分な権限を持っているならば、この定年期限問題は省略されても良いことになろう。不幸にして、諸氏の中には50歳定年の背景に何らかの「隠し事」をしているのではないかと我々は感じており、いろいろな理由をかまえて50歳までの登録問題に安易な道を選ぼうとしているのではないだろうか。我々は勿論のこと反対論で、諸氏と討論するつもりである。現在の定年期限の見方について、私は若干の国ではその将来の需要についての長期的計画を持っているとはまったく思えないことに驚きを感じている。明かに毎年一年オーバーした状態で登録しているのは前払い的行為であると見ている。これは、とりもなおさず審判部長はその国のIHFレフェリーが50歳に達することを当然知っていることになる。そこで、国際的に通用するトップレフェリーの補充交代を継続させるため定年期限を意識することも審判部長の義務である。

後継者育成について

ある国が、その国のトップに位置するペアがあるとしても、一方のレフェリーが年齢的に、またその他の理由で引退しなければならなくなれば、その国は後継者の選抜育成をしていないとして世界選手権大会への資格がないものとされることが絶対に起こらぬようにすべきである。しかし、これは近年再々起こっていることである。我々の忠告を無視して、次のシーズンへの選抜を変更しない国は今までそのためしはない。

しかしながら、我々はこの正しい路線が危うくなって来つつあるように思っている。

諸氏が知る通り、PRCは世界選手権大会およびヨーロッパカップ大会のレフェリーを指名するだけであり、IHFレフェリーとして国際的に推薦任用される道を開くのはもともと各国審判部長の仕事である。それゆえ、この推薦については細心の注意を払ってもらいたい。もし、諸氏が国際的にトップレフェリーを望むならば、国際的スケールで選抜した上で、1ペアまたは2ペアを他の平均的IHFレフェリーより多くの試合吹笛チャンス取得を確実にするようなトレーニングを施すべきである。ベストレフェリーがこのような優先特恵的な大会にチャンスを得て早期に多くの経験を積むだけでなく、そのペアはハンドボールの世界を通じて急速に知られる存在となるであろう。他国からの招待を自国レフェリーと対等条件で共有することは容易であるが、このこと自体は必ずしもベストレフェリーとしての進歩に役立つとは限らない。

重ねて、加えて言うが、Aリストに登録されたペア数が多過ぎると、それは選抜トレーニング（IHF）を行なう時に不利益となる。このことについては後日、ヤニス・グリンベルガス（ソ連）がPRCの立場で述べるが、すべてのペアの中から選んで試合を割当てることが可能かどうか考えものである。

前述の通り、我々としてはそんなに多くのレフェリーを必要としているわけではないし、当然のなりゆきとしてAリストに多数登録している国の立派なレフェリーであっても、質を重視して、少数を登録する国からの同等の良いレフェリーよりも少ない割当という結果になる。そこで、我々の忠告は、その国はＩＨＦの要求するレフェリーリストに順序番号をつけることである。

1988～1989シーズンのためのリストには320名のパネルA、335名のパネルBが登録されている。その中には、Bリストに10名以上の候補者を入れている国が11ケ国ある。ある国は、Aコースにパスする力があるとして、全部で17名も登録している。正直に言って、私はこれらを信用しない。そこで、大事をとる意味で注意を喚起するが、Bリストと言うものは、ウエイティングリストのたぐいのものであり、このリストにある者は国際試合を担当することは許されていない。国際試合は、必然的に国際的テストに合格したレフェリーを要求するのが当然の権利である。中にはパネルAテストを受けずに、その国の内部事情で何年も前に登録された高年齢のレフェリーも若干見られる。

Bリストにある候補者は、Aへのテストが実施される時は出席を要求されるが、しかしこれはあくまでもAレフェリーが不足欠乏しているときのだけに行なわれるものである。そこで、ある国がより多くのAレフェリーを必要とする時は、前述のように、それぞれの国のAレフェリーの員数状態を調べることになる。こんな場合には、審判部長は、その地域のゴッドファーザーと相談して助言を得るようにしてもらいたい。我々としては出来るだけのことをするつもりである。

Aライセンスへの公式コースでは、PRCから2名出席して、候補者を良く知るためのチャンスにするが、このテストを終ると次に会うのはいつになるかわからない。公式コースにおいては、これが本質的にテストを前提としており、テスト試合に吹笛することこそ最重要性をもつものであるため、残念ながら事前トレーニングも出来ない。Bリストに登録される以前のレフェリートレーニングは審判部長の責任である。

カスカイス（ポルトガル）でのシンポジウムで、PRCはIHFレフェリーリストは各国の責任で作成することと、新たに、その順位づけをするように示唆した。今までのいろいろなリストをもとにして順位づけでの昇進または格下げが検証され、賛否の票によっては申請が拒否されることになる。PRCは4年毎の改選後直ちにこの仕事にかかっており、エリートクラスの変動に対処するための良い方法手段を得ようとしている。この目的は勿論のこと、全般的に高い標準の幅広いトップレベルの確保にある。そして我々は多大の関心を持ってエリートレフェリーのトレーニングについての討論の機会が近々に到来するのを楽しみにしている。

エリートレフェリー研修について

今日のエリートレフェリーのための高度なトレーニングについては、プレイヤー側のそれと比べて恥ずかしいくらい貧困である。プレイヤー側はA世界選手権大会やオリンピック大会に出る時は、通常100日以上もかけて優秀なコーチのもとでトレーニングしている。彼らは、これらの大会前には各期間にわたって無給またはそれ同然の休暇をとってトップレベルのイベント大会出場準備にすべてを集中している。他方ふりかえって、レフェリー側は？と言えば、3ケ月前に行なわれるテストコースは別として、組織として彼らにしてやれる最大のことは大会開始日の当日の半日ミニコースに招くことだけしかないのである。ここで再び話題は、この困難課題に立ち向かえる優秀なレフェリーの供給について各審判部長の助力に信頼しなければならない。それを継続しなければならないと言うことに戻ってくる。

我々は、各審判部長が彼らのレフェリー準備に心要な諸条件（チャンス）の整備について可能なかぎりベストの努力するであろうと信じるしかない。これをしてくれれば、レフェリーは身体的にも知的にも良いコンディションが整えられ、そしてまたオフシーズン（オリンピックや世界選手権大会は通常オフシーズンに開催される）での試合のための感覚を維持することが可能となる。仮に、あるレフェリーが本来の基準から逸脱しているとの指摘で指名を取り消されたとしても、それはけっして不名誉なことではないが、何らかの世界選手権大会に国を代表する立場となるレフェリーが準備不足の状態で送り込まれることは明かにスキャンダルであるとしか言えない。

レフェリー活動の実情

1988年6月ユーゴスラビアのスコピエでオリンピック前のテストコースが行なわれたが、我々の友人たるイワン・スノイ氏がコーチ部門を代表して出席した。彼の仕事は、今までの実地場面の様子を報告することであり、次のようなコメントを示した（部分のみ）。

◇　レフェリーは段階的罰則適用について極めて優柔不断である。

レフェリーは防御者が相手プレイヤーに対して、ボールを目的

とせずに腕や脚を使うことを許してしまっている。ここで私はルール8—13を引用する。

「相手に対する動作（8—4～11）での反則のとき、ボールでなくプレイヤーを対象としている場合には、罰則を段階的に適用しなければならない。この罰則の段階的適用は、スポーツマンシップに反する行為についても適用される。（17—1ｄ、17—3ｃ）」

私の考えでは、現行のルールブックの中で8—13が最も重要であるとする。そして、ルールを守ることが何とコーチ陣によって支えられているということについて何か答えることはないのか？

スノイ氏はこうも言っている。

◇激しさと粗暴なプレイが勝利の手段であってはならない。

これは真に素晴らしい響きのある言葉ではないか。しかし、我々レフェリーはこの目標が白熱した試合の中ではいとも簡単に忘れ去られてしまうことを知っている。それとも、白熱した試合の他に何か原因があるのか？ひょっとしたらコーチやプレイヤーは我々と一緒に講義室に座って我々の方針に賛成するだけであり、コートで勝利への戦いをしないつもりだというのか？

いかなる場合でもレフェリーの義務は、ルールの定める範囲内での試合運行であることは言うまでもない。レフェリーは限界基準を設定し、それから逸脱しないようにする。試合が終わってからプレイヤーに脱線したことを弁解告白しても何の役にも立たないし、「あんな試合にはとてもついて行けない」と言われるだけである。レフェリーは罰則適用に勇気を持つべきであり、その状況に正確な判断評価を下さなければならない。難しいのは、罰を課して威圧するのではなく、試合状況の感知能力と勇気を具備することである。

スノイ氏は続けて言う。（その引用）

◇同じように、レフェリーは8—14（失格について）と8—15（追放）の適用について、しばしば不十分な取り扱いをしている。相手プレイヤーに対しての極端な反則または粗暴行為の場合、攻撃側は失格または追放とされるべきではないか。

スイノ氏はコーチ部門のメンバーとして有能な人物であり、同時に全コーチの代表でもある。彼がくり返して我々に忠告しているのは、ルールの厳正な適用ということである。

今述べたように、ルールブック中最も重要なことは8—13である。65～67ページにある交代地域規定の処理に目を向けて見よう。ここでもレフェリーは無分別にも寛大に容認しており、この点にも注意を喚起して、ルール規定に従うようにレフェリーを訓練しなければならない。この部分の第5項では、チーム役員はチームの指導や世話をする上でスポーツマンとして見苦しくない精神で対処すべき権利と義務があると記されている。この実行では、チーム役員はベンチに座っていなければならない。第5項2ｂを見ても、レフェリーや競技役員に対して義務妨害したり、侮辱したりする態度言行を禁じているのは明白である。

ベンチ規定についてのレフェリー

我々は国際レベルにおいてすら頻繁に多くのレフェリーが交代ベンチに寛容であるとともに、いかにレフェリーが彼らの傲慢さ、横柄さに弱いかも見ている。当然ながら、プレイヤーがベンチ役員の言動に大きく影響されることから、すべてレフェリーはベンチ役員のどんな点を許しまた我慢すべきかをすでに良く知っているはずである。コート上の威信確立についての我々の努力は、すでにベンチにいる者の秩序を保つことで始められている。明かにこれは、まずレフェリーがその遵守状況を見て行動することを我々は要求する。

観察と評価システム

レフェリートレーニングには、また実際にレフェリー観察のことも含まれる。ＰＲＣは多くの国で優れた観察評価が実施され、レフェリーサイドにも正しい評価として認められていることを満足に思っている。どこでも多くのレフェリーが定年引退後もなお別のハンドボールの分野で奉仕する道を見出して熱中できるのも好ましいことである。

多くのＩＨＦレフェリーはもっと多くの観察レポートが作られていないことに不満を持つと聞いている。ここで諸氏に思い出してもらいたいことは、ＩＨＦのイベント大会には比較評価のため公式観察者が派遣されていることである。彼らはレポートを作成し、そのコピーはシーズン終りに諸氏のもとへ送られる。これはヨーロッパカップ大会のことを引用しているが、すべての試合に中立的立場の観察者を派遣する必要性は考えなくてよい。すべての場合、観察者の主要任務はレフェリーを見るだけでなく、試合全体を対象として見ることである。

世界選手権大会やオリンピック大会では必ず一人のＩＨＦ代表が立ち会うことになっている。そこでこれらのレポートをもっと広範囲に配布する可能性について考えてみたい。レポートは確かに作られた。しかし現在にいたるまで観察者の不十分な集中力のため、いつも出版できない状態にある。もし彼が一日に何試合か観察して、その他にまだ別の仕事を持っているとすれば、そのレポートの質は

おそらく正式出版にほど遠い、低いものとなるであろう。この件の改善については注目する。

私はレフェリーのトレーニングとその他のレフェリーについての注意事項を話したが、実際レフェリーを訓練するということは、その前に彼らの素質の萌芽を見出すことを早期にスタートすべきであると考える。

新人発掘について

多くの国が何らかのトラブルを起こした挙句、レフェリー候補者を発掘するシステムを考えている（これはBリスト候補者のことではない）。彼らはどのスポーツの世界からでも良いが、世界のトップに達するプレイヤー以外で、将来の見込みの乏しい若者を捜す。また別の角度では教師を、勿論体育教師を用いようとする。あるいは、任務以外の余暇時間を興味あるものにしたいと考える警察や軍隊に在職する人もしばしば見られる。

一般的に言って、各自の職務で指導的役割を果たしている人の中から捜し出すことは誠に結構なことである。彼らはスポーツの場でも同様の役割をつとめることに適しており、勿論我々としては前に述べたような権威をひけらかす熟練者よりも、むしろ試合のリーダーとしてふさわしいレフェリーと見ている。

何よりも普通で容易な手段は、高齢化したプレイヤーの中から新しいレフェリーを選び出そうとすることである。しかしながら、これには例外もあり、この人物が30歳以上であり、その上過去15年間にレフェリーと悶着を起こしたことがあれば、場合によっては喜んで迎える気持は反対となる。これと別にPRCは30歳ですでに何年にもわたってトップリーグで素晴らしい吹笛を示している若い人々の関心を引きつけるようにしたいと考えている。これらの場合は、それぞれの国内で向上を図る好適の候補者であり、2・3年のうちに国際ライセンスに挑戦可能となるであろう。

女性レフェリーについて

私が近年不可解に思っていることは、性別による資質の評価についての問題の多い現在、女性でレフェリー部門で成功する者が誠に少ないということである。もし、少数でもペアがいるのであれば、彼女らにジュニアや女子部門だけでなくもっと多くの試合を吹かせられないものか？。私はもっと多くのレフェリーがこの問題に取り組み、新人発掘そして補充とトレーニングについての経済的援助の可能性の有無を問題にしてもよいではないかと考えている。スウェーデンの例をあげれば、国庫による基金が中央スポーツ機関を通じてハンドボール協会へ、「女性レフェリー育成のためのプロジェクト用」に割当配分されている。この件についての結論は、まだ時期尚早である。

私は自宅でも、このことについて家族と論議し、私が女性は困難状態の発生について素早く正確な決定を下すことには不向きではないかとの説をしたところ、私の妻はこれを軽蔑的に拒否した。私は諸氏の研究調査がうまくいくように願っている。

不運なことに、レフェリーの不足により中立的な立場のレフェリーが一人の状態で試合をしなければならなくなり、それをクラブチームに了承させて試合に出してしまうといった悪い状態は時として止むを得ないであろうが、悲しいかな、これはレフェリーの立場を危うくするものである。

ルールとレフェリーに関する大量の問題点から、私はPRCがハンドボールの発展に極めて重要であると考えるいくつかを選び出した。我々はハンドボールを委託されている限り公的業務を実行するに当たって、現在の立場、地位で最善を尽くすだけでなく、ハンドボールの将来を幅広い視野と聴感覚で見渡す義務を担っているのである。

我々は常に新しいアイディアを歓迎するとともに、他のハンドボール専門家たちと共同で実験的試行や評価を行なう態勢を確立しなければならない。

我々一同（各国審判部長、ハンドボール専門家、PRCとIHFの代表者）は、それぞれの責任を自覚するべきである。試合はレフェリーなしでは出来ないのだ。良いレフェリーはどこにでも転がっているものではない。レフェリーとは、素質あるものを発掘して育てあげるべきものであるということは万人周知の事実なのである。以上が今回のシンポジウムの目標である。

私はリエージュでの会合が困難はあるにしても、成功裡に終わることを期待しており、今回の催しに深甚な心づかいで準備に当たった人々に厚く御礼を申し上げる。この人たちの積極的支援があればこそシンポジウムは成功に導かれるものなのである。我々がここで見た徴候は正に「良」である。

さあ、このシンポジウムを通じて一緒に責任を果たすことにとりかかろう。

御静聴を謝す

エリック・エリアス

提言

試合中の抗議を少なくするために

谷戸忠司
（読売新聞運動部）



ハンドボールの試合を取材するたびに、気になることがひとつある。それは、レフェリーの判定にベンチがクレームをつける度合いが、他の球技の試合に比べて、きわめて多いことだ。先日、日本リーグが女子の優勝が決まった大崎電気―日本ビクター戦でも、こんなシーンを目撃した。

前半、大崎のエース尹秉順が右サイドから放ったシュートが、ビクターGKの顔を直撃。GKは顔をおおって倒れ、これを見たレフェリーは尹を退場処分にした。

もちろん、大崎の李相玉監督は猛然と抗議した。「キーパーの顔の両側はシュートの狙いどころのひとつ。決して顔を狙ったわけではない。結果的に当たったからといって、退場はひどすぎる」というわけだ。

判定は覆らなかったが、これはレフェリーのミスジャッジ。関係者に聞いたところによると、大学の試合では、「顔にボールをぶつけると退場」の申し合わせがあるそうで、それを日本リーグの試合でも適用してしまったようだ。試合後、レフェリーの一人は「退場にすべきではなかった」と誤りを認めていたという。しかし、この判定は、その後の両チームを必要以上にエキサイトさせ、内容的につまらない試合にしてしまった。

スピードがあって身体接触も多い―。ハンドボールが他の球技に比べ、レフェリングが難しいことは確かである。だが、審判員の技術の差が大きく、試合によって判定が違ってしまうのは困る。実際、全日本総合などを取材していると、監督などから「次の試合は○○さんが（笛を）吹くからやりにくい」などという言葉を聞くことがある。当時者は、先刻承知していることと思うが、審判技術の〝底上げ〟は急務である。

また、クレームの多さは、レフェリーと現場とで、プレーの判定についての認識が食い違っていることが、一因になっているように思う。

一般に、現場サイドは「反則を厳しく取って、退場者が続出したら試合はつまらなくなる」という考え方で、審判側は「ルールはルール」が基本線のようだ。

どちらがいい、悪いというのではない。ただ、事前に「このプレーはOK、これは反則」ということを互いに承知していれば、抗議はぐんと少なくなるはずだ。

そのために、各チーム指導陣と審判陣団との合同ルールミーティングを開く必要がある。それも、年に一回などでなく、大きな大会のたびに開いて、意思統一を図るべきだろう。試合によって反則の基準が異なるようでは、選手もプレーに自信が持てなくなる。

第14回日本リーグ2部

男子・中村荷役 女子・日立栃木 が優勝を飾る

男子

◇10月7日(土)
熊本県総合体育館

本田技研熊本 28 〔17—11 / 11—14〕 25 日本電装

〔戦評〕前半、お互いにシュートミスが目立ち互角のスタート。電装がリード、それを本田が追いかける展開で進んだ。16分過ぎ、本田が荒田、三代の左腕コンビで逆転に成功、そのままリードを奪うかと思われたが、再び電装が追いつき、本田の甘いディフェンスもあって14—11と電装が3点をリードして折り返す。

後半開始早々、本田は田中(浩)のポスト、田中(孝)のミドルでじわじわと追い上げる。15分過ぎには遂に本田が逆転、その後も激しい点の取り合いを見せたが、本田が3点差をつけて逃げ切った。

得	〔本田〕		〔電装〕	得
0	中尾	GK	森	0
0	宮本		高橋	0
3	矢野	FP	杉村	7
3	荒田		橋本	0
3	三代	〔審・大和・鈴木〕	西木戸	1
6	松村		久本	5
2	田中		岸田	5
1	山口		岡崎	1
5	川崎		樋口	3
0	村田		近藤	0
5	出中		難波	3
0	堀内		柴田	0
28	⓪	PT	(3)	25

◇10月8日(日)
富山県総合体育館

豊田自動織機 21 〔11—10 / 10—10〕 20 トヨタ車体

〔戦評〕互いにミスの目立つ試合となったが、前半20分過ぎから、わずかに脚力に勝る豊田織機がディフェンス力に上回って試合の主導権を奪った。

後半立ち上がりからリードを奪った豊田織機をトヨタ車体も終盤必死に追い上げたが、要所でのシュートミスが目立ち、一歩及ばなかった。

得	〔織機〕		〔車体〕	得
0	柴田	GK	宮田	0
			村林	0
4	蟹江	FP	吉続	5
1	奥畑		福田	1
7	大野	〔審・小坪・幸塚〕	岡島	2
0	諫山		河合	2
1	倉田		藤長	4
5	山内		平川	0
0	新田		久保山	0
3	鎌田		長野	5
0	杉浦		蓑田	1
0	山田		崎野	0
21	(3)	PT	(1)	20

◇10月8日(日)
岡山県営体育館

中村荷役運輸 27 〔14—13 / 8—13〕 21 トヨタ自動車

〔戦評〕立ち上がり、中村が呉のシュートなどでリードを奪い、ペースをつかんだかに見えたが、トヨタ自動車も速攻を中心に追いつく。その後は追いつ追われつの展開を見せ13—13の互角のまま前半を終了。

後半5分過ぎから中村がGK石井の好守などでリズムをつかみ、じりじりとリードを広げてトヨタ自動車をふり切った。

得	〔中村〕		〔自動車〕	得
0	石井	GK	西井	0
0	飯塚		富森	0
9	田口	FP	香井	4
0	塚田		川田	5
2	堀戸	〔審・大塚・丸川〕	酒井	0
0	大木		堀江	4
4	下戸成		中西	3
2	三尾		田村	0
7	呉		石本	0
0	栗原		松尾	0
3	田中		村上	0
0	大野		杉元	5
27	(2)	PT	(2)	21

10月8日(日)
佐久市総合体育館

三景 30 〔17—13 / 16—12〕 28 竹芝精巧

〔戦評〕前半立ち上がり、竹芝が桐木の得点で先行したが、三景もすぐに追いつく。中盤、竹芝にシュートミスが目立ち、三景がリードしたが、竹芝も20分過ぎから追い上げ13—12で前半を終了。

後半、立ち上がりすぐに竹芝が追いつき、その後一進一退の激しい展開を見せるが、三景がややリードして進む。終盤、竹芝も激しく追い上げるが、終了間際、三景がダメ押しを上げて逃げ切る。

得	〔三景〕		〔竹芝〕	得
0	中村	GK	小幡	0
0	北川		大屋	0
4	斉藤	FP	中間	13
0	高橋		桐木	4
4	小金山	〔審・中村・佐野〕	馬場	3
0	木原		三本	1
6	金井		今村	5
4	近藤		野崎	1
6	田村		吉川	1
6	福士		一ノ瀬	0
0	福永		森口	0
0	高橋		百合野	0
30	(3)	PT	(5)	28

◇10月10日(火)
秋田・湯沢高校体育館

中村荷役運輸 26 〔12—14 / 14—11〕 25 三景

〔戦評〕出だし、両チームともロングシュートが決まり、中村の田口、呉のロングシュートに対し、三景は高橋のミドルシュートや速攻、ポストで応戦する。

後半に入り、三景のGKの好守により、一進一退の好ゲームとなるが、終了間際、中村・田口の連続カットインで勝負が決まった。

得	〔中村〕		〔三景〕	得
0	石井	GK	中村	0
0	飯塚		北川	0
10	田口	FP	斉藤	6
0	塚田		高橋	6
1	堀戸	〔審・小友・谷藤〕	小金山	0
0	大木		木原	0
2	下戸成		金井	8
1	三尾		近藤	0
7	呉		田村	1
0	栗原		福士	4
5	田中		福永	0
0	大野			
26	(2)	PT	(3)	25

◇10月15日(日)
徳島市立体育館

トヨタ自動車 27 〔12—15 / 9—7〕 16 豊田自動織機

〔戦評〕地力に勝るトヨタ自動車は、前半、サイド、ポスト、ロングと多彩な攻撃で徐々に差を広げた。
後半に入り、豊田自動織機はGKの活躍で立ち上がり5分までに5点差と詰め寄ったが、ここまで川田の連続得点などで次々に加点、トヨタ自動車の楽勝となった。

	〔織機〕	得	〔自動車〕	得
GK	柴田	0	西井	0
	中村	0	富森	0
FP	蟹江	2	香井	3
	奥畑	3	川田	9
	諫山	0	酒井	1
	倉田	3	堀江	2
	山内	5	中西	2
	新田	1	田村	2
	伊藤	0	石本	0
	鎌田	0	松尾	0
	杉浦	1	杉元	5
	山田	1	森	3
PT	(1)	16	(3)	27

〔審・岡本 中川〕

◇10月15日(日) 清水市営体育館

トヨタ車体 31 （16―9、15―16） 25 日本電装

〔戦評〕前半開始早々、トヨタ車体が積極的なディフェンスから日本電装のパスをカットして速攻を連発、主導権を握る。その後両チームとも得点を重ねたが、16―9と車体が7点をリードして前半を折り返す。
後半に入っても、車体は吉続、長野を中心に加点したのに対し、電装は再三のチャンスを逃し、追い上げのリズムをつかめないまま車体が逃げ切った。

	〔電装〕	得	〔車体〕	得
GK	福山	0	宮田	0
	高橋	0	工藤	0
FP	杉村	9	吉続	7
	橋本	0	福田	0
	藤崎	1	岡島	5
	久本	3	河合	3
	岸田	6	藤長	3
	岡崎	2	平川	2
	樋口	3	久保山	0
	近藤	0	長野	11
	難波	0	蓑田	0
	柴田	1	井上	0
PT	(5)	25	(2)	31

〔審・細沢 清水〕

◇10月15日(日) 山梨・緑ケ丘公園体育館

竹芝精巧 28 （15―12、13―13） 25 本田技研熊本

〔戦評〕前半立ち上がりから点の取り合いとなったが、15分過ぎから竹芝の速攻などがよく決まり、前半は竹芝の3点リードで終る。
後半に入っても終始竹芝のペースで進み、一時は5点差までリードしたが、本田も粘り強く追い上げたが、結局前半のリードを保った竹芝が快勝した。

	〔本田〕	得	〔竹芝〕	得
GK	中尾	0	小幡	0
	宮本	0	大屋	0
FP	矢野	1	中間	12
	荒田	0	桐木	4
	三代	6	馬場	2
	松村	6	三本	1
	田中	2	今村	6
	山口	0	野崎	2
	川崎	8	吉川	1
	村田	0	一ノ瀬	0
	田中	2	森口	0
	堀内	0	百合野	0
PT	(5)	25	(4)	28

〔審・菊島 古屋〕

◇10月21日(土) 岩井市総合体育館

中村荷役運輸 30 （19―7、11―8） 15 豊田自動織機

〔戦評〕前半の立ち上がりから中村荷役が圧倒、豊田自動織機は10分過ぎにようやく初得点をあげる拙攻で、前半で19―7と大差をつけられてしまった。
後半に入り、豊田も懸命の反撃を見せたが、中盤得点が伸びず、中村が終盤にかけて突き放し、大差をつけて快勝した。

	〔織機〕	得	〔中村〕	得
GK	柴田	0	石井	0
	中村	0	飯塚	0
FP	蟹江	2	田口	5
	奥畑	4	堀戸	3
	大野	5	大木	2
	諫山	0	下戸成	5
	山内	2	塚田	4
	倉田	0	三尾	4
	伊藤	0	呉	5
	鎌田	1	栗原	1
	杉浦	1	田中	1
	山田	0	大野	0
PT	(1)	15	(0)	30

〔審・田中 高野〕

◇10月22日(日) 青森県民体育館

三景 34 （19―10、15―17） 27 本田技研熊本

〔戦評〕三景は前半からよく走り、19―10と大きくリードして折り返す。守ってはGK中村の好守で爆発的な攻撃力の本田熊本を押さえる。攻めては金井がよく動き、斉藤、高橋のロング、セミロングで加点した。
後半、本田熊本も反撃を見せ、残り7分には28―24と追い上げたが、今一歩追いきれず、終盤再び突き放されてしまった。

	〔本田〕	得	〔三景〕	得
GK	中尾	0	中村	0
	宮本	0	長橋	0
FP	矢野	1	斉藤	8
	荒田	0	高橋	6
	三代	6	小金山	7
	松村	1	木原	0
	田中	2	金井	4
	山口	0	近藤	2
	川崎	12	福士	7
	村田	0	福永	0
	田中	3	中野	0
	堀内	2	高橋	0
PT	(5)	27	(4)	34

〔審・町屋 佐々木〕

◇10月22日(日) 群馬・富岡高校体育館

トヨタ自動車 35 （17―15、18―15） 30 日本電装

〔戦評〕前半、トヨタ自動車は川田、杉元のロングシュートで加点。一方日本電装は、サイド及びポストで加点し、シーソーゲームを展開したが、トヨタがやや有利で前半を終了。
後半、日本電装のGKが替わり立ち上がりトヨタのロングシュートを阻止、流れが変わるかに見えたが、5分ぐらいから再びロングが決まりだし、着実に加点して、リードを保って逃げ切った。

	〔電装〕	得	〔自動車〕	得
GK	福山	0	西井	0
	高橋	0	富森	0
FP	杉村	8	香井	4
	橋本	3	川田	9
	久本	2	酒井	1
	岸田	0	堀江	5
	井上	6	中西	1
	岡崎	1	田村	3
	樋口	3	石本	1
	近藤	1	松尾	0
	難波	4	杉元	9
	柴田	2	森	2
PT	(4)	30	(2)	35

〔審・桜井 今井〕

◇10月22日(日) 京都・西京極体育館

竹芝精巧 25 （12―10、13―9） 19 トヨタ車体

〔戦評〕トヨタ車体・吉続のポストシュートでゲームが始まる。トヨタは長野のミドルシュートを中心とした攻撃、一方竹芝はポストを利用した攻撃でセットでは互角の状態でわたり合うが、竹芝が2点をリードして折り返す。
後半に入っても、セットを中心とした攻撃になるが、お互いシュートミスが目立ち、個人技による展開が多くなる。徐々に竹芝の攻撃がコンビよく決まりだし、じりじりとリードを広げて勝利を収めた。

	〔車体〕	得	〔竹芝〕	得
GK	宮田	0	小幡	0
	村林	0	大屋	0
FP	吉続	3	中間	8
	君島	3	桐木	6
	福田	0	馬場	1
	岡島	1	三本	0
	河合	2	今村	5
	藤長	0	野崎	2
	平川	2	吉川	3
	久保山	0	一ノ瀬	0
	長野	8	森口	0
	蓑田	0	百合野	0
PT	(3)	19	(2)	25

〔審・佐谷 狩野〕

◇10月28日（土）　知立市福祉体育館

トヨタ車体 28（12―16｜16―10）26 三景

〔戦評〕立ち上がり、三景にミスが目立ち、これを確実に得点に結びつけたトヨタが4―1とリード。その後もトヨタは君島、長野を軸に得点を重ねた。一方三景も斉藤、福士を中心に攻撃するが、トヨタGK宮田の好キーピングに合い、得点が伸びず、16―10とトヨタが6点をリードして折り返した。

後半立ち上がり、三景が先手をとるが、なかなか連続ゴールを奪えず、5～10分にかけてミスから相手に速攻を許し苦しい展開となる。15分過ぎより三景GK中村のキーピングがようやく冴えだし、猛追を見せたが一歩及ばなかった。

得	〔車体〕		〔三景〕	得
0	宮田	GK	中村	0
0	村林	GK	長橋	0
5	吉続	FP	斉藤	4
5	君島	FP	高橋	2
0	福田	FP	小金山	2
1	岡島	FP	木原	0
3	河合	FP	金井	9
3	藤長	FP	近藤	1
0	平川	FP	田村	4
0	久保山	FP	福士	4
11	長野	FP	福永	0
0	蓑田	FP		
28	(2)	PT	(3)	26

（審・杉本・工藤）

◇10月28日（土）　知立市福祉体育館

日本電装 27（15―10｜12―10）20 豊田自動織機

〔戦評〕豊田・奥畑のミドルで先制、さらに蟹江がPT2本を確実に決め、豊田の優勢で試合が進んだ。日本電装も杉村の豪快なロングで反撃し、終盤にはGKの好守、好ディフェンスから速攻を生かして逆転、12―10で前半を終了。

後半に入ると、若い日本電装の走力が豊田を上回り、速攻を軸に得点を重ね、リードを広げて快勝した。

得	〔電装〕		〔織機〕	得
0	森	GK	柴田	0
0	高橋	GK	中村	0
6	杉村	FP	蟹江	6
5	橋本	FP	奥畑	2
4	久本	FP	大野	4
1	岸田	FP	諫山	2
4	井上	FP	倉田	0
3	岡崎	FP	山内	1
1	樋口	FP	伊藤	0
0	近藤	FP	鎌田	2
3	難波	FP	杉浦	1
0	柴田	FP	山田	2
27	(1)	PT	(5)	20

（審・浅野・工藤）

◇10月29日（日）　松山市総合体育館

トヨタ自動車 28（17―11｜11―17）28 本田技研熊本

〔戦評〕前半立ち上がり、本田が田中（孝）のPTで先制、以後も快調に加点、17―11と6点をリードして前半を終える。

後半に入り、中盤までは一進一退の互角の展開であったが、中盤を過ぎてトヨタが猛追を見せ、遂に終了1分前にはトヨタ・川田が決めて28―28の同点として引き分ける。

得	〔自動車〕		〔本田〕	得
0	西井	GK	中尾	0
0	富森	GK	宮本	0
3	香井	FP	矢野	0
7	川田	FP	荒田	0
3	酒井	FP	三代	3
6	堀江	FP	松村	5
0	中西	FP	田中浩	2
0	田村	FP	山口	0
1	石本	FP	川崎	8
1	松尾	FP	村田	0
7	杉元	FP	田中孝	10
0	森	FP	堀内	0
28	(1)	PT	(4)	28

（審・柳原・田中）

◇10月29日（日）　岩手県営体育館

中村荷役運輸 32（20―10｜12―10）20 竹芝精巧

〔戦評〕前半立ち上がり、中村がやや優位に展開、終始リードを保って展開したが、竹芝も5本のPTを決めるなど、粘りを見せて12―10と2点差で終了。

後半に入ると、中村・下戸成、三尾が立て続けに得点をあげ、竹芝を一方的に引き離して大差をつけて快勝した。

得	〔中村〕		〔竹芝〕	得
0	石井	GK	小幡	0
0	飯塚	GK	大屋	0
10	田口	FP	中間	8
1	塚田	FP	桐木	4
0	堀戸	FP	馬場	2
0	大木	FP	三本	0
7	下戸成	FP	今村	5
5	三尾	FP	野崎	0
6	呉	FP	吉川	1
0	猪巻	FP	一ノ瀬	0
1	栗原	FP	森口	0
2	田中	FP	百合野	0
32	(1)	PT	(7)	20

（審・小笠原・高橋）

◇11月3日（金）　山形・北村山高校体育館

本田技研熊本 25（16―11｜9―8）19 豊田自動織機

〔戦評〕前半立ち上がり固さの見えた両チーム、10分まで3―2というロースコアーの展開。豊田はシュートミスが多く、9―8と本田が1点をリードして折り返す。

後半に入り、本田は松村を中心に着々と加点、豊田も後半は数少ないシュートを確実に決めて粘りを見せたが及ばなかった。

得	〔本田〕		〔織機〕	得
0	中尾	GK	柴田	0
0	宮本	GK	中村	0
0	矢野	FP	蟹江	1
3	荒田	FP	奥畑	4
1	三代	FP	大野	4
11	松村	FP	諫山	0
0	田中浩	FP	倉田	0
0	山口	FP	山内	7
7	川崎	FP	新田	0
0	村田	FP	伊藤	0
3	田中孝	FP	鎌田	2
0	堀内	FP	杉浦	1
25	(0)	PT	(2)	19

（審・星川・佐東）

◇11月3日（金）　山形・北村山高校体育館

中村荷役運輸 34（17―15｜17―12）27 トヨタ車体

〔戦評〕前半、中村は呉のシュートを中心に好調な滑り出しを見せ終始リードを奪う。

後半に入っても同様な展開で、両チームともにディフェンスに荒さがあり、点の取り合いとなったが、呉を中心として得点力に上回

る中村が逃げ切った。

	〔車体〕	得	〔中村〕	得
GK	宮田	0	石井	0
GK	村林	0	飯塚	0
FP	吉続	6	田口	6
FP	君島	4	塚田	2
FP	福田	0	堀戸	4
FP	岡島	3	大木	0
FP	河合	7	下戸成	2
FP	藤長	0	大沼	1
FP	平川	0	三尾	5
FP	久保山	0	呉	10
FP	長野	7	栗原	0
FP	蓑田	0	田中	4
		27		34
PT		(1)		(4)

（審・鎌田、安孫子）

◇11月3日(金) 山形・北村山高校体育館

三景 26 （15—12 / 11—11） 23 日本電装

〔戦評〕三景はGK中村の好守で安定した攻防を見せた。一方、日本電装は若さが出てミスが目立ち、15—12と三景が3点をリードして前半を終了。

後半に入り、立ち上がり日本電装はいったんは同点にまで追いついたが、中盤再び突き放され、一歩及ばなかった。

	〔電装〕	得	〔三景〕	得
GK	森	0	中村	0
GK	高橋	0	北川	0
FP	杉村	8	斉藤	8
FP	橋本	1	高橋	3
FP	藤崎	0	小金山	4
FP	久本	1	木原	0
FP	岸田	3	金井	3
FP	井上	2	近藤	0
FP	岡崎	3	田村	6
FP	樋口	0	福士	1
FP	難波	5	福永	1
FP	柴田	0	高橋	0
		23		26
PT		(4)		(1)

（審・斉藤、伊藤）

◇11月3日(金) 山形・北村山高校体育館

竹芝精巧 30 （17—9 / 13—17） 26 トヨタ自動車

〔戦評〕元気のないトヨタに対し竹芝は馬場，桐木，中間とセット、速攻とそつなく加点、17—9と大きくリードして前半で大勢を決した。

後半に入り、トヨタも懸命に反撃、残り10分を切って速攻、セットと得点を重ねたが、前半の点差が大きく、追いつくまでには至らなかった。

	〔自動車〕	得	〔竹芝〕	得
GK	西井	0	小幡	0
GK	富森	0	大屋	0
FP	香井	5	中間	10
FP	川田	8	桐木	8
FP	酒井	2	馬場	3
FP	堀江	0	三本	1
FP	田村	0	今村	5
FP	石本	0	野崎	0
FP	松尾	5	吉川	2
FP	村上	1	長野	0
FP	杉元	2	森口	0
FP	森	3	百合野	0
		26		30
PT		(2)		(1)

（審・青木、高橋）

◇11月4日(土) 山形・北村山高校体育館

竹芝精巧 25 （11—10 / 14—11） 21 日本電装

〔戦評〕前半立ち上がり、竹芝・中間が先制、その後一進一退の展開が続き、11—10と竹芝の1点リードで折り返す。

後半も全く互角の展開で一進一退をくり返したが、中盤を過ぎて中間などの活躍で竹芝がじりじりと引き離して逃げ切った。

	〔電装〕	得	〔竹芝〕	得
GK	森	0	小幡	0
GK	高橋	0	大屋	0
FP	杉村	2	中間	11
FP	橋本	3	桐木	5
FP	藤崎	0	馬場	0
FP	久本	4	三本	2
FP	井上	3	今村	4
FP	岡崎	4	野崎	0
FP	樋口	0	吉川	3
FP	近藤	0	一ノ瀬	0
FP	難波	5	森口	0
FP	柴田	0	百合野	0
		21		25
PT		(0)		(3)

（審・星川、佐東）

◇11月4日(土) 山形・北村山高校体育館

中村荷役運輸 29 （13—11 / 16—13） 24 本田技研熊本

〔戦評〕優勝への大事な一戦とあって立ち上がりやや固さの見えた中村だったが、中盤着々と加点、13—11と2点をリードして前半を終了。

後半に入っても一進一退の展開ながら、終始先手をとった中村が安定した攻守で逃げ切り、6年ぶりの優勝を決定づけた。

	〔本田〕	得	〔中村〕	得
GK	中尾	0	石井	0
GK	宮本	0	飯塚	0
FP	矢野	0	田口	4
FP	荒田	1	塚田	3
FP	三代	3	堀戸	4
FP	松村	4	大木	0
FP	田中浩	3	下戸成	5
FP	山口	1	大沼	0
FP	川崎	9	三尾	4
FP	村田	1	呉	7
FP	田中孝	2	栗原	0
FP	堀内	0	田中	2
		24		29
PT		(2)		(2)

（審・高野、中島）

◇11月4日(土) 山形・北村山高校体育館

トヨタ自動車 37 （21—10 / 16—17） 27 トヨタ車体

〔戦評〕前半立ち上がりから自動車が着々と加点、一方の車体はなかなか得点が伸びず、10分には8—3と自動車がリード。その後も自動車は全員ムラなく得点、21—10と大きくリードして前半で勝負を決定づけた。

後半、車体も懸命の反撃を見せ激しい点のとり合いとなったが、前半の点差が大きすぎた。

	〔車体〕	得	〔自動車〕	得
GK	宮田	0	西井	0
GK	村林	0	富森	0
FP	吉続	5	香井	6
FP	君島	2	川田	12
FP	福田	0	酒井	0
FP	岡島	3	堀江	3
FP	河合	5	中西	1
FP	藤長	2	田村	5
FP	平川	0	石本	3
FP	久保山	0	松尾	3
FP	長野	10	杉元	4
FP	蓑田	1	森	0
		27		37
PT		(2)		(2)

（審・安孫子、高橋）

◇11月4日(土) 山形・北村山高校体育館

三景 27 （14—9 / 13—11） 20 豊田自動織機

〔戦評〕前半立ち上がり、三景がシュートチャンスを確実に決めて優位に立つ。中盤から豊田も互角の攻防を見せるが、14—9と三景が5点をリードして前半を終る。

後半も三景がいい立ち上がりを見せ、その後豊田も全く互角の展開を見せたものの、点差を縮めることはできなかった。

	〔織機〕	得	〔三景〕	得
GK	柴田	0	中村	0
GK	中村	0	北川	0
FP	蟹江	6	斉藤	7
FP	奥畑	2	高橋	1
FP	大野	6	小金山	7
FP	諫山	5	木原	0
FP	倉田	0	金井	6
FP	山内	1	近藤	2
FP	伊藤	0	田村	0
FP	鎌田	0	福士	1
FP	杉浦	0	福永	3
FP	山田	0	高橋	0
		20		27
PT		(5)		(0)

（審・鎌田、安孫子）

◇11月5日(日) 東根市体育館

中村荷役運輸 37 （20—11 / 17—17） 28 日本電装

〔戦評〕中村はスタートこそ固かったが、田口、呉の両大砲が豪快なシュートで前半を20—11と大きくリードを奪った。

後半、日本電装も互角の勝負を展開したが、前半の大量リードで余裕をもった中村が、そのリードを守り切って全勝で優勝を飾った。

	〔電装〕	得	〔中村〕	得
GK	森	0	石井	0
GK	高橋	0	飯塚	0
FP	杉村	6	田口	11
FP	橋本	6	塚田	3
FP	藤崎	1	堀戸	3
FP	久本	5	大木	0
FP	井上	3	下戸成	4
FP	岡崎	2	大沼	2
FP	樋口	0	三尾	1
FP	近藤	1	呉	11
FP	難波	4	栗原	1
FP	柴田	0	田中	1
		28		37
PT		(1)		(3)

（審・星川、佐東）

◇11月5日(日) 東根市体育館

豊田自動織機 20 〔10―7 / 10―11〕 18 竹芝精巧

〔戦評〕前半立ち上がりは互角の展開を見せたが、中盤からじりじりと豊田がリードを奪い、10―7と3点をリードして前半を終了。
後半に入ると、両チームともシュートミスが目立ち、6分間互いに無得点の立ち上がりを見せたがその後全くの一進一退の展開。竹芝も懸命の追撃を見せたが僅かに及ばなかった。

得	〔織機〕		〔竹芝〕	得
0	柴田	GK	小幡	0
0	中村	GK	大屋	0
7	蟹江	FP	中間	5
2	奥畑	FP	桐木	2
5	大野	FP	馬場	3
0	諫山	FP	三本	3
0	倉田	FP	今村	2
4	山内	FP	野崎	1
0	新田	FP	吉川	2
2	鎌田	FP	一ノ瀬	0
0	杉浦	FP	森口	0
0	山田	FP	百合野	0
20	(1)	PT	(2)	18

（審・菅野 半田）

◇11月5日(日) 東根市体育館

トヨタ自動車 35 〔19―12 / 16―13〕 25 三景

〔戦評〕前半20分やではほぼ互角の展開であったが、残り10分を切ってからトヨタが一気に得点を伸ばし、実に10分間で11得点をあげて19―12と7点をリードして折り返す。
後半に入ってもトヨタが先行、三景も終盤追撃を見せたが、点差が開きすぎてしまった。

得	〔自動車〕		〔三景〕	得
0	西井	GK	中村	0
0	富森	GK	長橋	0
6	香井	FP	斉藤	2
8	川田	FP	高橋宏	2
2	酒井	FP	小金山	1
6	堀江	FP	木原	0
1	中西	FP	金井	6
7	田村	FP	近藤	4
0	松尾	FP	田村	3
5	杉元	FP	福士	7
0	森	FP	福永	0
		FP	高橋裕	0
35	(2)	PT	(0)	25

（審・青木 安孫子）

◇11月5日(日) 東根市体育館

本田技研熊本 35 〔18―9 / 17―12〕 21 トヨタ車体

〔戦評〕前半立ち上がり、トヨタはシュートミスを重ね、実に10分間無得点。一方本田は着々と加点して18―9と大きくリードして前半を終了。
後半に入っても流れは変らず、着々と得点を加える本田に対し、トヨタも頑張りを見せたものの及ばなかった。

得	〔本田〕		〔車体〕	得
0	中尾	GK	宮田	0
0	宮下	GK	村林	0
1	矢野	FP	吉続	7
1	荒田	FP	君島	6
7	三代	FP	福田	1
6	松村	FP	岡島	1
2	田中浩	FP	河合	1
3	山口	FP	藤長	2
2	川崎	FP	久保山	1
3	村田	FP	長野	1
8	田中孝	FP	蓑田	0
2	堀内	FP	井上	1
35	(1)	PT	(4)	21

（審・安孫子 高橋）

〔順位〕①中村荷役運輸②トヨタ自動車③本田技研熊本④竹芝精巧⑤三景⑥トヨタ車体⑦日本電装⑧豊田自動織機

女子

◇10月8日(日) 富山県総合体育館

北国銀行 32 〔18―5 / 14―5〕 10 JUKI

〔戦評〕前半立ち上がり、両チームともシュートミスが多く、15分頃まで5―3とロースコアであったが、中盤過ぎから北国が速攻などで着々と加点、18―5と大きくリードして前半を終了。
後半に入っても流れは変わらず北国は松田、林などが着々と加点、一方のJUKIは依然としてシュートミスが多くて得点につながらず、大差で敗れた。

得	〔北国〕		〔JU〕	得
0	木戸	GK	大角	0
0	岩井	GK		
3	上田	FP	石塚	1
6	林	FP	佐藤	5
0	丹後	FP	上田	0
6	松田	FP	石井	0
3	北川	FP	嶋田	1
3	矢野	FP	伊原	1
1	塙	FP	熊谷	2
1	北川	FP	武藤	0
4	金	FP	羽田	0
5	呉	FP	田中	0
32	(5)	PT	(0)	10

（審・光安 中山）

◇10月10日(火) 秋田・湯沢高校体育館

日立栃木 29 〔14―9 / 15―7〕 16 ムネカタ

〔戦評〕前半、20分まで両チームともディフェンスが固く、一進一退の好ゲームであったが、日立栃木・尾苗のロング、カットインシュートが決まりだし、14―9と5点をリードして前半を終了。
後半に入っても日立の速攻が冴え、終始日立のペースで試合を運び、リードを大きく広げて快勝した。

得	〔日立〕		〔ムネ〕	得
0	岡本	GK	我妻	0
0	梅津	GK	山崎	0
7	尾苗	FP	伊藤	0
2	神永	FP	皆川	1
0	神長	FP	川名	1
1	柳田	FP	太田	3
5	山岸	FP	桜井	10
3	吉鶴	FP	高橋	1
0	繁在家	FP	上遠野	0
4	岡田	FP	菅野	0
5	新井	FP	佐々木	0
2	堤	FP	遠藤	0
29	(2)	PT	(2)	16

（審・佐々木 佐藤）

◇10月14日(土) 明石中央体育館

ブラザー工業 26 〔17―4 / 9―7〕 11 JUKI

〔戦評〕前半立ち上がり1分、荒木のペナルティースローで先取点をあげたブラザー工業は、前半10分で6―2と主導権をとった。その後も速攻、ポストプレーなど多彩な攻撃で加点、17―4と大きくリードして折り返した。
後半、JUKIもよく粘り、一進一退の攻防が続いたが、前半の点差が大きく、そのままあぶなげなく、ブラザー工業が逃げ切った。

得	〔ブ工〕		〔JU〕	得
0	岡本	GK	大角	0
0	西住	GK		
8	荒木	FP	石塚	2
0	末永	FP	佐藤	4
0	小栗	FP	上田	1
0	坂倉	FP	石井	2
3	道上	FP	嶋田	0
3	松尾	FP	伊原	0
6	進藤	FP	熊谷	2
4	野田	FP	武藤	0
2	甲斐	FP	羽田	0
0	田中	FP	平山	0
26	(2)	PT	(2)	11

（審・小山 田中）

◇10月14日(日) 明石中央体育館

日立栃木 25 〔15―9 / 10―12〕 21 ソニー国分

〔戦評〕前半7分まで日立が4―0とリード、ソニーは永尾のロングシュートで1点を返すが、日立の固いディフェンスに手こずり、

得	〔日立〕		〔ソニー〕	得
0	岡本	GK	阿多石	0
0	梅津	GK	古賀	0
4	尾苗	FP	藤元	5
0	神永	FP	平山	0
3	柳田	FP	白石	0
4	山岸	FP	楠本	0
0	吉鶴	FP	林	3
6	飯塚	FP	東郷	0
2	岡田	FP	山口	2
4	石毛	FP	安山	0
2	新井	FP	大住	3
0	堤	FP	永尾	8
25	(0)	PT	(4)	21

（審・馬場 浜田）

ミスから日立の速攻を許し、15—9と日立の6点リードで折り返す。
後半、ソニーが足をよく動かし積極的なディフェンスで対抗、再三退場者を出すが、踏んばり、シーソーゲームとなるが、日立が25—21で逃げ切った。

◇10月14日(土)
明石中央体育館

北国銀行41〔19—4 22—8〕12ムネカタ

〔戦評〕前半立ち上がり、北国・金の鋭いカットインで先行したが、その後両チームとも動きが固く、シュートミスが目立った。10分を過ぎると動きもスムーズになり、北国は宮本の出足の速い速攻、サイドシュートなどで着実に加点していった。一方ムネカタは、5分桜井のペナルティーで初得点をあげたが、北国の固い守りを崩せず20分まで無得点が続いた。その後はムネカタ桜井のロングなどで加点したが、19—4の大差で前半を終了した。
後半も北国の勢いは衰えず、森の速攻、金のスピードあるロングシュートで加点した。一方ムネカタは菅野のサイドシュートなどで得点するが、最後まで止めることができず、大差でゲームが終了した。

得	〔北国〕		〔ムネ〕	得
0	木戸	GK	我妻	0
0	岩井		山崎	0
3	丹後	FP	伊藤	0
2	松田		皆川	0
3	矢野		川名	2
4	塙	(審・北山 杉森)	太田	0
2	北川		桜井	8
8	金		高橋	0
9	森		上遠野	2
4	宮本		菅野	0
3	松下		佐々木	0
3	谷本		遠藤	0
41	(4)	PT	(5)	12

◇10月15日(日)
明石中央体育館

ソニー国分25〔12—8 13—11〕19ムネカタ

〔戦評〕開始早々、ソニー藤元が速攻で押し込み5点を連取する。ムネカタは9分、太田のカットインで初得点。ソニーは山口のミドル、永尾のロング、ムネカタは速攻、カットインで得点を重ねる。ムネカタ桜井のロングを再三ソニーGK阿多石がはじき返し、よく守った。ソニーはPTなどで得点を重ね、12—8で折り返した。
後半、ムネカタはソニー伊藤にマンツーマン・ディフェンスでリズムを崩しにかかるが、ソニーは走り回り、シュートへ。ムネカタもポスト、サイドで追い上げるがソニーは速攻、PTなどで加点して逃げ切った。

得	〔ソニー〕		〔ムネ〕	得
0	阿多石	GK	我妻	0
0	古賀		山崎	0
7	藤元	FP	伊藤	1
3	平山		皆川	1
1	楠本		川名	1
5	林	(審・小山 国府)	太田	5
1	東郷		桜井	4
4	山口		高橋	2
0	安山		上遠野	3
0	飯		菅野	2
0	大住		佐々木	0
4	永尾		遠藤	0
25	(2)	PT	(1)	19

◇10月15日(日)
明石中央体育館

日立栃木27〔15—6 12—11〕17JUKI

〔戦評〕立ち上がり、日立・飯塚のカットインで先行。その後両チームとも当たりが厳しいゲームとなった。中盤になり、JUKIのミスから日立は速攻を連発して得点を重ね、前半15—6と日立が大きくリードして折り返した。
後半もいきなり日立が3点連取するなど日立のペースでゲームが進み、JUKI佐藤のロング、嶋田のポストシュートなどで反撃を見せるが、結局前半の点差が大きすぎ、追いすがることはできなかった。

得	〔日立〕		〔JU〕	得
0	岡本	GK	大角	0
0	梅津			
5	尾苗	FP	石塚	1
1	神永		佐藤	4
4	柳田		上田	5
2	山岸	(審・馬場 浜田)	石井	0
1	吉鶴		嶋田	5
6	飯塚		伊原	0
3	岡田		熊谷	2
0	石毛		羽田	0
4	新井		田中	0
1	堤		平山	0
27	(2)	PT	(0)	17

◇10月15日(日)
明石中央体育館

北国銀行29〔13—11 16—13〕24ブラザー工業

〔戦評〕立ち上がり、北国・金がPTで先行、しかし、ブラザーも松尾のサイドシュートで追いつき、荒木のロング、小栗のサイドで逆転、7分には3—1とリード。北国もロングを立て続けに決めて再逆転、以後互いに一進一退の展開で、13—11と北国の2点リードで前半を終了。
後半に入り、前半同様一進一退の攻防が続いたが、ブラザーはどうしても追いつくことができず、終盤得点を追加した北国が粘るブラザーをふり切った。

得	〔北国〕		〔ブ工〕	得
0	木戸	GK	岡本	0
0	岩井		西住	0
1	上田	FP	荒木	5
5	林		末永	7
2	丹後		小栗	1
4	松田	(審・北山 西園)	坂倉	0
0	矢野		道上	6
0	塙		松尾	2
3	北川		進藤	3
6	金		野田	0
0	森		甲斐	0
8	呉		高木	0
29	(2)	PT	(3)	24

◇10月22日(日)
青森県総合運動公園体育館

JUKI27〔11—11 16—12〕23ムネカタ

〔戦評〕前半、11—10とJUKIの1点リードで迎えた終盤、ムネカタがノータイムでフリースローを決め、同点として終了。
後半に入っても互いに譲らず、一進一退の互角のまま終盤へ。残り6分を切ってJUKIが23—23

から一歩リード、ムネカタはPTをJUKI GK大角に阻まれるなど得点できず、JUKIが立て続けて加点、ふり切った。

	〔ムネ〕	得		〔JU〕	得
GK	我妻	0	GK	大角	0
GK	山崎	0	FP	石塚	5
FP	伊藤	0	FP	佐藤	7
FP	皆川	7	FP	上田	6
FP	川名	1	FP	石井	1
FP	太田	0	FP	嶋田	2
FP	桜井	6	FP	伊原	0
FP	高橋	3	FP	熊谷	6
FP	上遠野	3	FP	武藤	0
FP	菅野	3	FP	羽田	0
FP	佐々木	0	FP	田中	0
FP	遠藤	0			
PT	(1)	23	PT	(4)	27

〔審・工藤、横山〕

◇10月22日(日) 京都・西京極体育館

ブラザー工業 23 〔13－7 / 10－11〕 18 ソニー国分

〔戦評〕前半、ブラザー・野田のカットイン、ソニー・大住の速攻によりゲームが動きだし、10分まで互いに一進一退で進む。15分過ぎ、ブラザー・荒木のロングとソニーに3回の痛い退場があった間に着実に得点を重ね、6点差で前半を終える。

後半に入り、ソニーはブラザー・野田にハーフマンツーをつけ、ブラザーの攻撃を抑えるが、前半の点差を縮めるまではいかず、ブラザーが逃げ切った。

	〔ソニー〕	得		〔ブ工〕	得
GK	阿多石	0	GK	岡本	0
GK	古賀	0	GK	西住	0
FP	藤元	5	FP	荒木	7
FP	平山	1	FP	末永	3
FP	楠本	0	FP	坂倉	1
FP	林	3	FP	道上	3
FP	東郷	0	FP	松尾	2
FP	山口	3	FP	進藤	4
FP	安山	0	FP	野田	0
FP	飯	0	FP	甲斐	0
FP	大住	1	FP	高木	0
FP	永尾	5	FP	田中	0
PT	(3)	18	PT	(4)	23

〔審・小山、佐路〕

◇10月28日(土) 知立市福祉体育館

日立栃木 25 〔10－9 / 15－7〕 16 ブラザー工業

〔戦評〕前半立ち上がり2分、ブラザーが荒木のミドルシュートで先制。その後もポスト、PTを確実に決めて10分には4－1とリードを奪う。しかし、日立も12分過ぎより連続4ゴールをあげて7－6と逆転、その後一進一退の攻防を見せたが、10－9と日立が1点をリードして折り返した。

後半に入り、日立はブラザー・荒木にマンツーマンをしき、これが成功して4連続得点をあげ、ブラザーのミスも出て点差を広げて快勝した。

	〔ブ工〕	得		〔日立〕	得
GK	岡本	0	GK	梅津	0
GK	西住	0	GK	阿部	0
FP	荒木	9	FP	尾苗	1
FP	末永	2	FP	神永	0
FP	板倉	0	FP	柳田	2
FP	道上	2	FP	山岸	6
FP	松尾	0	FP	吉鶴	2
FP	進藤	1	FP	飯塚	7
FP	野田	2	FP	岡田	2
FP	甲斐	0	FP	繁在家	0
FP	高木	0	FP	石毛	0
FP	田中	0	FP	新井	5
PT	(6)	16	PT	(3)	25

〔審・細沢、清水〕

◇10月29日(日) 大分県総合体育館

北国銀行 32 〔14－11 / 18－10〕 21 ソニー国分

〔戦評〕北国が速攻で3点を連取、ソニー永尾がロングで追う。北国はポスト、サイドなどで加点、試合の主導権を握って前半を終了。

後半、ソニーは藤元のフェイントや平山の速攻で追うが、北国は速攻、ポスト、ロングなどで着々と加点、ソニーをふり切った。

	〔ソニー〕	得		〔北国〕	得
GK	阿多石	0	GK	木戸	0
GK	古賀	0	GK	岩井	0
FP	藤元	6	FP	上田	1
FP	平山	1	FP	林	0
FP	白石	0	FP	丹後	2
FP	楠本	2	FP	松田	8
FP	林	2	FP	北川	7
FP	山口	1	FP	矢野	3
FP	安山	0	FP	塙	1
FP	飯	0	FP	北川	2
FP	大住	3	FP	金	4
FP	永尾	6	FP	呉	4
PT	(2)	21	PT	(4)	32

〔審・田原、佐藤〕

◇11月4日(土) 四日市市体育館

JUKI 25 〔12－13 / 13－12〕 25 ソニー国分

〔戦評〕ソニーのポストシュートを織り混ぜた攻めに対し、JUKIもミドルシュートで打ち返し、前半13－12と1点差で終了した。

後半10分過ぎ、一時3点差とソニーがリードし、そのままいくかと思われたが、残り2分を切ってJUKI佐藤がPTを決めて25－25の同点に追いつき引き分けた。

	〔ソニー〕	得		〔JU〕	得
GK	阿多石	0	GK	大角	0
GK	古賀	0	FP	石塚	3
FP	藤元	9	FP	佐藤	11
FP	平山	4	FP	上田	2
FP	楠本	0	FP	石井	5
FP	林	4	FP	嶋田	2
FP	東郷	0	FP	伊原	0
FP	山口	3	FP	熊谷	2
FP	安山	0	FP	武藤	0
FP	飯	0	FP	羽田	0
FP	大住	0	FP	平山	0
FP	永尾	5			
PT	(6)	25	PT	(4)	25

〔審・夏目、松ヶ谷〕

◇11月4日(土) 岐阜県民体育館

日立栃木 28 〔13－12 / 15－8〕 20 北国銀行

〔戦評〕前半立ち上がり10分まではお互いやや足の止まった試合展開でシーソーゲームであったが、その後18分まで日立は得点なく、逆に北国ペースであったが、18分から日立・尾苗のロングが決まるようになり、25分に13－12と逆転して前半を終了。

後半、北国の守りのミスから日立はPT、速攻と連続得点して完全に日立ペースとなり、17分には26－16とリードを広げ、ほぼゲームを決定づけた。

	〔北国〕	得		〔日立〕	得
GK	木戸	0	GK	岡本	0
GK	岩井	0	GK	梅津	0
FP	上田	2	FP	尾苗	7
FP	丹後	2	FP	神永	0
FP	松田	3	FP	神長	0
FP	北川	5	FP	柳田	3
FP	矢野	0	FP	山岸	4
FP	塙	0	FP	吉鶴	1
FP	北川	0	FP	飯塚	5
FP	金	6	FP	岡田	3
FP	森	2	FP	石毛	0
FP	谷本	0	FP	新井	5
PT	(4)	20	PT	(4)	28

〔審・浅野、工藤〕

◇11月5日(日) 愛知・枇杷島体育館

ブラザー工業 29 〔14－6 / 15－6〕 12 ムネカタ

〔戦評〕ブラザーは荒木のロングシュートが好調に決まり、前半15分までに8－1と全くブラザーのペースの試合となった。一方ムネカタは、ブラザーのロングシュートに対し守りが甘く、14－6で前半を終了。

後半開始5分まではムネカタもよく動きペースをつかむかに見えたが、徐々にミスが多くなり、ブラザーが連続して得点、大差のついたゲームとなった。

	〔ムネ〕	得		〔ブ工〕	得
GK	我妻	0	GK	岡本	0
GK	山崎	0	GK	西住	0
FP	伊藤	0	FP	荒木	8
FP	皆川	3	FP	末永	6
FP	川名	0	FP	坂倉	3
FP	桜井	3	FP	道上	4
FP	高橋	1	FP	松尾	2
FP	上遠野	5	FP	進藤	1
FP	菅野	0	FP	野田	3
FP	佐々木	0	FP	甲斐	1
FP	遠藤	0	FP	高木	1
			FP	田中	0
PT	(1)	12	PT	(2)	29

〔審・吉田、杉本〕

〔順位〕①日立栃木②北国銀行③ブラザー工業④JUKI⑤ソニー国分⑥ムネカタ

各地学生秋季リーグ戦結果

北海道学生

（10月13〜15日／札幌中島体育センターほか）

▼男子1部

小樽商大 21－21 函館教大
函館大 56－18 北海学園大
北大 46－14 北大医学部
函館大 49－13 函館教大
小樽商大 21－21 北大医学部
北大 39－22 北海学園大
函館大 34－5 小樽商大
北大 39－18 函館教大
北海学園大 35－24 北大医学部
北大 31－19 小樽商大
函館大 67－9 北大医学部
北海学園大 37－24 函館教大
小樽商大 18－16 北海学園大
函館教大 29－20 北大医学部
函館大 33－18 北大

〔順位〕①函館大②北海道大③北海学園大④小樽商科大⑤北海道教育大函館分校⑥北海道大医学部

▼男子2部

北海道工大 19－16 室蘭工大
旭川教大 31－28 北星大
釧路教大 34－26 道都大
旭川教大 35－24 北海道工大
室蘭工大 27－16 釧路教大
北星大 25－20 道都大
釧路教大 24－22 北海道工大
室蘭工大 18－17 北星大
旭川教大 38－25 道都大
北星大 24－14 北海道工大
釧路教大 32－29 旭川教大
室蘭工大 32－22 道都大
北海道工大 28－28 道都大
室蘭工大 24－23 旭川教大
釧路教大 16－16 北星大

〔順位〕①室蘭工業大②北海道教育大旭川分校③北海道教育大釧路分校④北星学園大⑤北海道工業大⑥道都大

▼男子3部

札幌大 26－20 札幌学院大
札幌大 40－22 学園北見大
札幌大 28－9 北見工大
札幌学院大 27－12 北見工大
札幌学院大 41－14 学園北見大
学園北見大 25－25 北見工大

〔順位〕①札幌大②札幌学院大③北海学園北見大④北見工業大⑤釧路公立大

▼女子

北海道女短大 22－8 北星大
旭川教大 20－10 北星大
北海道女短大 10－9 旭川教大

〔順位〕①北海道女子短大②北海道教育大旭川分校③北星学園大

東北学生

（10月5〜8日／仙台市体育館）

▼男子1部

岩手大 31－23 東北大
東北福祉大 28－25 仙台大
東北大 29－27 福島大
東北学院大 31－27 仙台大
東北福祉大 29－20 東北大
仙台大 29－25 福島大
東北学院大 32－19 東北大
東北福祉大 33－16 福島大
東北学院大 30－18 岩手大
岩手大 27－20 仙台大
東北学院大 32－16 福島大
仙台大 25－21 東北大
東北福祉大 20－15 岩手大
岩手大 31－23 福島大
東北学院大 20－16 東北福祉大

〔順位〕①東北学院大②東北福祉大③岩手大④仙台大⑤東北大⑥福島大

▼男子2部

山形大 54－5 日大工学部
宮教大 29－28 秋田大
山形大 31－25 弘前大
宮教大 40－23 日大工学部
山形大 35－16 秋田大
宮教大 20－18 弘前大
秋田大 39－16 日大工学部
弘前大 39－10 日大工学部
山形大 27－19 宮教大
弘前大 28－19 秋田大

〔順位〕①山形大②宮城教育大③弘前大④秋田大⑤日大工学部

▼女子

福島大 26－11 岩手大
東北福祉大 34－8 宮教大
東北福祉大 29－5 岩手大
福島大 27－10 宮教大
岩手大 28－7 宮教大
東北福祉大 34－13 福島大

〔順位〕①東北福祉大②福島大③岩手大④宮城教育大

▼入替戦

東北大 26－24 宮教大
福島大 31－21 山形大

※東北大、福島大共に1部残留。

関東学生

▼男子1部

早大 24－15 慶大
筑波大 31－19 順大
中大 21－19 国士館大
日体大 28－22 日大
日体大 28－22 中大
早大 25－21 順大
筑波大 32－20 慶大
日大 24－18 国士館大
日体大 30－19 慶大
早大 29－21 中大
順大 26－23 国士館大
筑波大 24－24 日大
日体大 29－24 順大
筑波大 32－20 中大
国士館大 26－17 慶大
早大 26－24 日大
中大 29－24 順大
日大 29－19 慶大
日体大 26－23 早大
国士館大 27－24 筑波大
中大 25－17 慶大
順大 26－21 日大
国士館大 30－21 早大
日体大 27－21 筑波大
順大 32－13 慶大
日大 24－20 中大
日体大 29－20 国士館大
筑波大 27－25 早大

〔順位〕①日本体育大②筑波大③早稲田大④日本大⑤順天堂大⑥国士館大⑦中央大⑧慶応大

▼男子2部

明大 24－22 東学大
法大 25－18 拓大
国武大 33－13 東経大
東海大 29－17 青学大
東海大 24－12 拓大
法大 41－15 青学大
明大 19－16 国武大
東学大 29－21 東経大
東経大 25－22 青学大
拓大 19－15 明大
国武大 22－18 東海大
法大 38－18 東学大
東経大 26－18 拓大
明大 24－16 青学大
東海大 29－26 東学大

法大 24－22 国武大
国武大 35－18 拓大
法大 29－17 東経大
東学大 33－20 青学大
東海大 30－12 東経大
国武大 41－16 青学大
明大 23－20 法大
拓大 27－18 東学大
東海大 18－17 明大
明大 25－20 東経大
東学大 22－20 国武大
拓大 20－18 青学大
法大 21－21 東海大

〔順位〕①法政大②東海大③明治大④国際武道大⑤東京学芸大⑥拓殖大⑦東京経済大⑧青山学院大

▼男子3部

上智大 17－13 東大
芝浦工大 17－16 茨城大
専大 22－20 横浜商大
明星大 26－15 専大
茨城大 20－15 東大
上智大 20－18 東理大
明星大 30－18 東理大
横浜商大 19－9 上智大
専大 23－21 芝浦工大
茨城大 20－13 横浜商大
明星大 31－18 東大
専大 15－15 上智大
東理大 22－22 東大
明星大 19－16 茨城大
横浜商大 28－23 茨浦工大
東大 17－15 芝浦工大
茨城大 21－18 専大
明星大 20－16 上智大
横浜商大 19－19 東理大
芝浦工大 25－22 東理工
横浜商大 19－18 東大
明星大 31－15 芝浦工大
東理大 29－28 専大
上智大 21－20 茨城大
東大 23－19 専大
茨城大 24－22 東理大
芝浦工大 23－19 上智大
横浜商大 23－18 明星大

〔順位〕①明星大②横浜商科大③茨城大④上智大⑤芝浦工業大⑥専修大⑦東京大⑧東京理科大

▼男子4部

武蔵工大 19－17 駒大
防衛大 21－19 一橋大
立大 27－22 帝京大
東工大 17－14 東農大
帝京大 24－22 東農大
駒大 24－20 一橋大
立大 17－16 東工大
防衛大 22－12 武蔵工大
駒大 25－23 東工大
帝京大 33－17 防衛大
一橋大 15－14 東農大
武蔵工大 21－18 立大
一橋大 17－15 立大
東工大 26－11 防衛大
武蔵工大 27－26 東農大
駒大 23－16 帝京大
一橋大 24－17 帝京大
駒大 23－19 東農大
立大 19－15 防衛大
東工大 26－22 武蔵工大
武蔵工大 22－21 帝京大
立大 15－13 駒大
東農大 16－15 防衛大
東工大 19－17 一橋大
東農大 16－16 立大
帝京大 27－22 東工大
武蔵工大 24－19 一橋大
防衛大 23－21 駒大

〔順位〕①武蔵工業大②立教大③東京工業大④駒沢大⑤帝京大⑥一橋大⑦防衛大⑧東京農業大

▼男子5部

創価大 12－0 横浜国大
文教大 21－12 神奈川大
千葉大 23－19 明学大
都留大 24－22 独協大
千葉大 22－21 文教大
創価大 19－17 都留大
独協大 21－20 神奈川大
横浜国大 31－25 明学大
明学大 29－20 神奈川大
横浜国大 30－22 文教大
千葉大 24－10 都留大
創価大 22－21 独協大
横浜国大 31－13 独協大
千葉大 19－14 神奈川大
文教大 22－17 創価大
明学大 28－19 都留大
明学大 23－21 創価大
横浜国大 20－18 千葉大
文教大 30－20 独協大
神奈川大 22－14 都留大
明学大 20－16 独協大
都留大 23－20 文教大
横浜国大 25－21 神奈川大
千葉大 27－16 創価大
千葉大 17－14 独協大
横浜国大 34－22 都留大
神奈川大 21－15 創価大
明学大 33－24 文教大

〔順位〕①横浜国立大②千葉大③明治学院大④文教大⑤創価大⑥神奈川大⑦都留文科大⑧独協大

▼男子6部

玉川大 25－18 埼玉大
成蹊大 22－21 横浜市大
亜大 29－16 千葉工大
東洋大 30－21 産能大
産能大 30－26 埼玉大
成蹊大 19－13 千葉工大
玉川大 31－22 東洋大
横浜市大 41－25 亜大
産能大 24－19 成蹊大
玉川大 32－24 亜大
埼玉大 32－21 千葉工大
横浜市大 28－24 東洋大
産能大 18－18 亜大
玉川大 18－12 成蹊大
埼玉大 37－22 横浜市大
東洋大 32－19 千葉工大
産能大 26－22 千葉工大
玉川大 35－19 横浜市大
埼玉大 27－23 成蹊大
亜大 34－24 東洋大
産能大 29－19 横浜市大
玉川大 35－16 千葉工大
埼玉大 28－21 亜大
成蹊大 24－16 東洋大
埼玉大 35－23 東洋大
玉川大 24－18 産能大
成蹊大 40－28 亜大
横浜市大 32－13 千葉工大

〔順位〕①玉川大②埼玉大③産能大④成蹊大⑤横浜市立大⑥亜細亜大⑦東洋大⑧千葉工業大

▼男子7部Aグループ

工芸大 22－12 外語大
関学大 24－20 都立大
杏林大 30－15 東電大
工芸大 30－16 工科大
工芸大 20－16 東電大
関学大 31－16 工科大
都立大 16－15 杏林大
関学大 28－18 工芸大
外語大 34－14 工科大
都立大 21－21 東電大
関学大 22－16 杏林大
東電大 24－18 工科大
都立大 27－23 工芸大
関学大 25－19 外語大
杏林大 32－13 工科大
外語大 23－20 東電大
杏林大 28－16 外語大
都立大 33－16 工科大
関学大 29－16 東電大
杏林大 20－19 工芸大
都立大 30－17 外語大

〔順位〕①関東学院大②東京都立大③杏林大④東京工芸大⑤東京外語大⑥東電学園大⑦東京工科大

▼男子7部Bグループ

武蔵大 24－21 日工大
情報大 23－14 帝技大
群馬大 40－11 日工大
日工大 20－15 帝技大
農工大 23－8 情報大
群馬大 30－23 武蔵大
農工大 27－8 帝技大
農工大 23－17 武蔵大
情報大 24－21 日工大
群馬大 27－9 帝技大

情報大 24－19 武蔵大
群馬大 34－26 情報大
農工大 42－12 日工大
帝技大 16－13 武蔵大
群馬大 28－22 農工大
〔順位〕①群馬大②東京農工大③東京情報大④武蔵大⑤帝京技術科学大⑥日本工業大

▼男子7部入替予選決定戦

群馬大 23－16 関学大
都立大 16－14 農工大
〔総合順位〕①群馬大②関東学院大③東京都立大④東京農工大

▼女子1部

東女体大 33－10 東学大
日体大 32－15 東海大
筑波大 20－12 日女体大
東女体大 36－10 東学大
日体大 38－17 東海大
筑波大 27－15 日女体大
東女体大 38－14 東海大
日体大 29－24 日女体大
筑波大 39－15 東学大
東女体大 28－10 東海大
筑波大 39－15 東学大
日体大 23－19 日女体大
東女体大 38－18 日女体大
筑波大 21－17 日体大
東海大 19－13 東学大
東海大 18－13 東学大
東女体大 31－13 日女体大
日体大 23－16 筑波大
東海大 19－17 日女体大
筑波大 21－19 東女体大
日体大 38－19 東学大
日女体大 20－13 東海大
日体大 33－9 東学大
東女体大 21－21 筑波大
筑波大 26－17 東海大
日体大 22－21 東女体大
日女体大 31－18 東学大
日女体大 33－9 東学大
筑波大 36－9 東海大
日体大 21－16 東女体大
〔順位〕①日本体育大②筑波大③東京女子体育大④日本女子体育大⑤東海大⑥東京学芸大

▼女子2部

千明短大 20－17 茨城大
千明短大 33－7 千葉大
千明短大 33－9 横浜国大
千明短大 39－5 文教大
千明短大 31－8 玉川大
千明短大 46－8 都留文大
茨城大 23－20 千葉大
茨城大 27－14 横浜国大
茨城大 不明 文教大
茨城大 30－6 玉川大
茨城大 30－5 都留文大
千葉大 21－16 横浜国大
千葉大 18－15 文教大
千葉大 23－17 玉川大
千葉大 27－9 都留文大
文教大 25－20 横浜国大
文教大 19－15 玉川大
文教大 25－5 都留文大
玉川大 20－19 横浜国大
玉川大 21－10 都留文大
横浜国大 22－11 都留文大
〔順位〕①千葉明徳短大②茨城大③千葉大④文教大⑤玉川大⑥横浜国立大⑦都留文科大

▼入替戦

関東学院大（7部2位） 28－26 （6部7位）東洋大
群馬大（7部1位） 26－23 （6部8位）千葉工大
埼玉大（6部2位） 27－22 （5部7位）都留文大
玉川大（6部1位） 27－22 （5部8位）独協大
千葉大（5部2位） 26－18 （4部7位）防衛大
東学大（女1部6位） 27－15 （女2部1位）千明短大
横浜国大（5部1位） 24－22 （4部8位）東農大
東　大（3部7位） 22－11 （4部2位）立　大
武蔵工大（4部1位） 35－27 （3部8位）東理大
東経大（2部7位） 19－16 （3部2位）横浜商大
明星大（3部1位） 30－21 （2部8位）青学大
東海大（2部2位） 25－18 （1部7位）中　大
法　大（2部1位） 24－18 （1部8位）慶　大

※関東学院大、群馬大、埼玉大、玉川大、千葉大、横浜国立大、武蔵工業大、明星大、東海大、法政大が昇格、東京大、東京経済大、東京学芸大（女子）が残留しました。

北信越学生

（10月6～8日／福井県営体育館）

▼男子1部

福井大 17－15 富山大
新潟大 21－15 金沢工大
新潟大 21－15 福井大
金沢大 31－17 富山大
金沢工大 22－18 福井大
新潟大 28－20 富山大
金沢工大 16－13 金沢大
新潟大 17－17 金沢大
福井大 18－15 金沢大
金沢工大 22－16 富山大
〔順位〕①新潟大②金沢工大③福井大④金沢大⑤富山大

▼男子2部

金沢美大 24－20 長野大
信州大 35－9 富山医大
信州大 22－12 金沢美大
富山医大 22－17 長野大
富山医大 28－21 北陸大
信州大 30－16 長野大
金沢美大 22－17 富山医大
北陸大 23－9 長野大
金沢美大 26－17 北陸大
信州大 33－10 北陸大
〔順位〕①信州大②金沢美大③富山医薬大④北陸大⑤長野大

▼女子

新潟大 14－14 信州大
金沢大 16－8 信州大
富山大 14－11 新潟大
金沢大 15－9 新潟大
富山大 15－8 信州大
富山大 13－10 金沢大
〔順位〕①富山大②金沢大③新潟大④信州大

中四国学生

▼男子1部

愛媛大 16－14 山口大
愛媛大 17－16 広島大
愛媛大 18－13 高知大
愛媛大 19－10 松山大
山口大 17－17 広島大
山口大 21－16 高知大
山口大 21－15 松山大
広島大 17－17 高知大
広島大 22－21 松山大
高知大 22－13 松山大
〔順位〕①愛媛大②山口大③広島大④高知大⑤松山大

▼男子2部

徳山大 26－19 香川大
徳山大 20－17 岡山大
徳山大 32－16 近畿大
徳山大 28－16 島根大
香川大 20－20 岡山大
香川大 32－13 近畿大
香川大 26－17 島根大
岡山大 18－17 近畿大
岡山大 24－14 島根大
近畿大 18－15 島根大
〔順位〕①徳山大②香川大③岡山大④近畿大⑤島根大

男子3部

広島修道大 21－13 鳥取大
広島修道大 21－15 徳島大
広島工業大 17－16 広島修道大
広島工業大 26－21 徳島大
鳥取大 21－20 広島工業大
鳥取大 19－14 徳島大

〔順位〕①広島修道大②広島工業大③鳥取大④徳島大

▼女子1部

広島大 15—8 愛媛大
広島大 12—9 高知大
広島大 17—15 岡山県短
愛媛大 18—13 高知大
愛媛大 19—11 岡山県短
高知大 18—16 岡山県短

〔順位〕①広島大②愛媛大③高知大④岡山県立短大

▼女子2部

香川大 28—9 岡山大
香川大 28—1 岡山女短
岡山大 26—8 岡山女短

〔順位〕①香川大②岡山大③岡山女短大

福岡県学生

（10月15～29日／福岡大ほか）

▼男子1部

福岡大 46—15 九州産大
福岡大 51—9 福教大
福岡大 37—14 久留米工大
福岡大 42—10 九大
福岡大 29—25 東和大
東和大 58—25 九州産大
東和大 28—9 福教大
東和大 31—13 久留米工大
東和大 33—17 九大
九大 23—17 久留米工大
九大 31—17 九州産大
九大 31—22 福教大
久留米工大 21—20 福教大
久留米工大 34—27 九州産大
福教大 38—23 九州産大

▼男子2部

西南学院大 28—16 熊本大
西南学院大 33—13 産業医大
西南学院大 26—23 長崎大
西南学院大 28—25 長崎総科大
熊本大 32—19 長崎大
熊本大 41—4 産業医大
熊本大 27—26 長崎総科大
長崎総科大 42—23 産業医大
長崎総科大 28—18 長崎大
長崎大 15—13 産業医大

〔順位〕①西南学院大②熊本大③長崎総合科学大④長崎大⑤産業医科大

▼男子3部

九工大 31—23 九州共立大
九工大 35—20 西日本工大
九工大 22—21 福岡工大
福岡工大 34—17 西日本工大
九州共立大 23—18 福岡工大
西日本工大 29—19 九州共立大

〔順位〕①九州工業大②福岡工業大③九州共立大④西日本工業大

▼女子

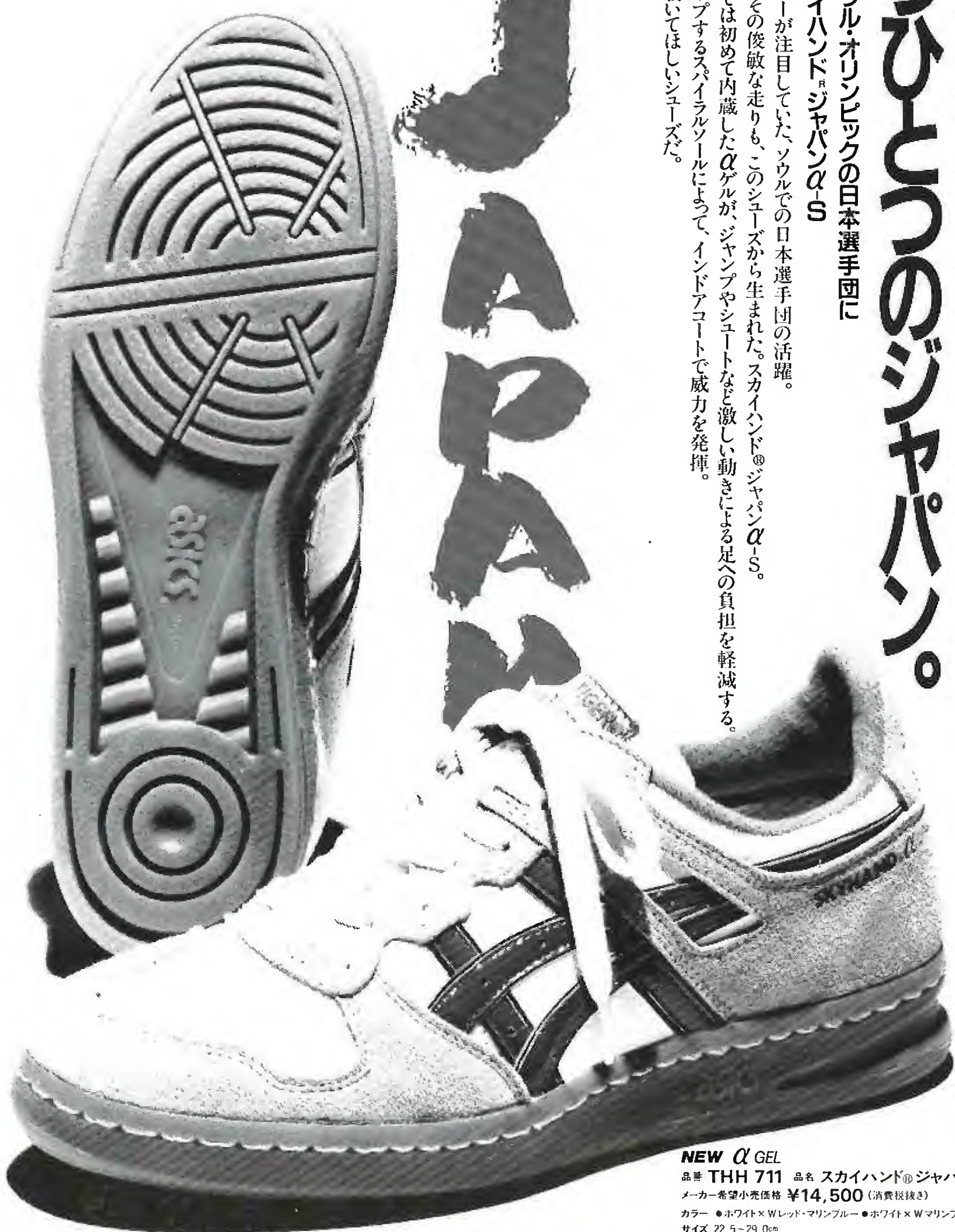
福岡大 43—8 長崎大
福岡大 36—21 福教大
福岡大 38—23 九女大
福教大 28—25 九女大
福教大 26—15 長崎大
九女大 36—15 長崎大

〔順位〕①福岡大②福岡教育大③九州女子大④長崎大

ソウルで活躍した、もうひとつのジャパン。

これが頂点。ソウル・オリンピックの日本選手団に
採用されたスカイハンド®ジャパンα-S

すべてのハンドボーラーが注目していた、ソウルでの日本選手団の活躍。
その鋭い切れ味も、その俊敏な走りも、このシューズから生まれた。スカイハンド®ジャパンα-S。
ハンドボールシューズでは初めて内蔵したαゲルが、ジャンプやシュートなど激しい動きによる足への負担を軽減する。
吸いつくようにグリップするスパイラルソールによって、インドアコートで威力を発揮。
これは、胸をはって履いてほしいシューズだ。



NEW α GEL
品番 THH 711　品名 スカイハンド®ジャパンα-S
メーカー希望小売価格 ¥14,500（消費税抜き）
カラー ●ホワイト×Wレッド・マリンブルー ●ホワイト×Wマリンブルー・レット
サイズ 22.5～29.0cm

asics® TIGER®

●商品についてのお問い合わせは株式会社アシックス消費者相談室までどうぞ
〒650 神戸市中央区港島中町7丁目1番1 TEL(078)303-2233(専用)・(078)303-3333(大代表)
〒130 東京都墨田区錦糸4丁目10番11号 TEL(03)624-1814(専用)・(03)624-2221(大代表)
■Rは㈱アシックスの登録商標です

株式会社アシックス

（財）日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』第二九四号
昭和四十年六月十… 平成二年一月二十六日 印刷
第三種郵便物認可 平成二年二月一日 発行
東京都渋谷区神…一－一
電話 代表（481）二三六一
振替 東京 六－五八三四八番
編集兼発行人 安藤純光
定価三百五拾円
（年間購読料三千三百円）